

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第401集

やなぎ さわ

柳沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局三陸国道工事事務所

× 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



柳沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会资本の充実もまた重要な一施策であります。特に高速道路網を始めとする道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところでもあります。

このような埋蔵文化財の保護・保存との調和も今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発に伴って止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査事業の実施に伴って、平成13年度に山田地区に所在する柳沢Ⅱ遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

遺跡は国道45号沿いに位置し、その道路は北は宮古、久慈方面、南は釜石、大船渡方面に通じる重要な路線として大きな役割をはたしています。

当遺跡は、中世には城館として、江戸時代には社地であることが明らかになりました。曲輪、土塁、土坑からは、縄文時代の土器、石器、陶磁器、江戸時代の錢貨、釘、炭化材が出土しており、周辺に存在する館跡との関連性や当時の社会状況を考える上での貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力とご支援を賜りました国土交通省東北地方整備局三陸国道工事事務所、山田町教育委員会をはじめとする関係各位、遺跡の発掘調査にご協力を頂いた地元山田町の方々に衷心より感謝申し上げます。

平成14年10月

財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 合 田 武

例　言

1. 本報告書は、岩手県下閉伊郡山田町山田第1地割11番15他に所在する柳沢Ⅱ遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局三陸国道工事事務所との協議を経て、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した緊急発掘調査である。
3. 岩手県遺跡台帳に登載されている遺跡番号はLG 94-0079、発掘調査時の略号はYS II-01である。
4. 発掘調査面積は8,400m²であり、発掘調査期間と調査担当者は以下のとおりである。

発掘調査期間　平成13年4月17日～7月31日

調査担当者　文化財調査員　阿部　徵

文化財調査員　佐藤　淳一

期限付調査員　原　美津子

5. 調査の室内整理期間と整理担当者は以下のとおりである。

室内整理期間　平成13年11月1日～平成14年3月31日

整理担当者　阿部　徵、佐藤　淳一

6. 本報告書の執筆は、阿部　徵が担当した。

7. 自然科学関連の分析鑑定は、次の方と機間に依頼した。(敬称略)

樹種鑑定　……………早坂松次郎(木炭協会)

8. 基準点測量、空中撮影、現況地形図の作成は次の機間に委託した。

基準点測量　……………鈴木設計測量事務所

空中撮影　……………東邦航空株式会社

現況地形図作成　……………株式会社ハイマー・テック

9. 発掘調査や室内整理・報告書の執筆にあたり、次の方々ならびに機関からご指導・ご協力をいただいた。(敬称略)

山田町役場、山田町教育委員会(長岡　豊、川向　豊子、佐々木　健)

10. 本遺跡から出土した遺物および調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序

例言

<本文>

I 調査に至る経過	3	IV 検出遺構と出土遺物	17
II 遺跡の位置と環境	3	1 曲輪	17
1 遺跡の位置と立地	3	2 土坑・土塁	28
(1) 位置と立地及び環境	3	3 切岸	28
(2) 基本層序	5	4 大杉神社（歩道跡）	29
2 歴史的環境	6	5 出土遺物	31
(1) 山田町の中世	6	(1) 出土した土器・陶器・石製品について	31
(2) 山田町内の中世城館遺跡	7	(2) 出土した貨幣について	31
(3) 柳沢Ⅱ遺跡の概要	9	(3) 出土した金属器・鉄滓について	31
III 調査方法と室内整理	14	Vまとめ	40
1 野外調査の方法	14	1 柳沢Ⅱ遺跡の年代観と性格	41
(1) 調査区のグリッド設定	14	VI 分析・鑑定	41
(2) 粗掘りと遺構検出・遺構精査と 遺物の取り上げ	15	1 柳沢Ⅱ遺跡炭化材樹種	41
(3) 零真撮影	15	報告書抄録	73
2 室内整理の方法	15	職員名簿	74
(1) 遺構	15		
(2) 遺物	15		

<図 版>

第1図 岩手県における遺跡の位置図	1	第9図 1号曲輪・1号土坑・1号土塁	18
第2図 遺跡の位置図	2	第10図 2号曲輪	19
第3図 遺跡周辺の地形	4	第11図 3号曲輪・4号曲輪	20
第4図 土層柱状図	5	第12図 5号曲輪・6号曲輪(1)	22
第5図 周辺の遺跡分布図	10	第13図 6号曲輪(2)	24
第6図 遺構配置図	13	第14図 7号曲輪	25
第7図 グリッド配置図	14	第15図 8号曲輪	26
第8図 拡張図	16	第16図 9号曲輪	27

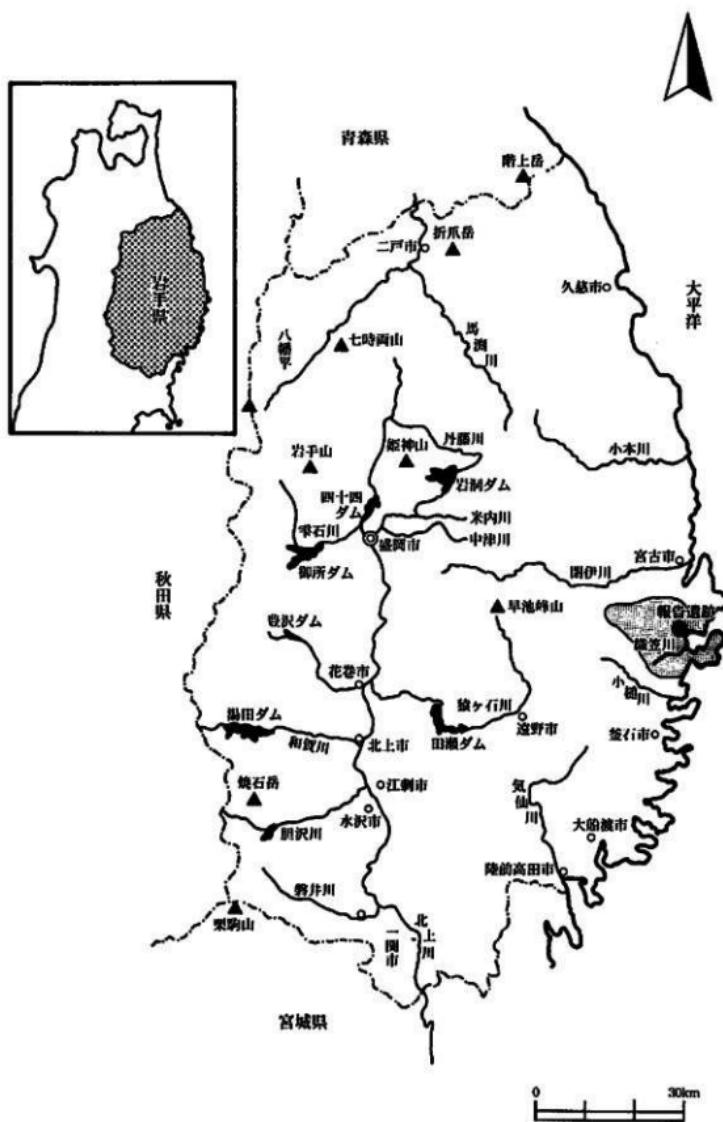
第17図 大杉神社（参道跡）	30	第21図 出土遺物 4（錢貨 1）	36
第18図 出土遺物 1（土器・陶器・石臼）	33	第22図 出土遺物 5（錢貨 2）	37
第19図 出土遺物 2（鉄製品 1）	34	第23図 出土遺物 6（錢貨 3）	38
第20図 出土遺物 3（鉄製品 2）	35	第24図 出土遺物 7（錢貨 4）	39

＜写真図版＞

写真図版 1 遺跡遠景	45	写真図版16 1号土坑	60
写真図版 2 空中写真（1）	46	写真図版17 遺物出土状況 ・1号土壙・2号土壙	61
写真図版 3 空中写真（2）	47	写真図版18 大杉神社参道跡（1）	62
写真図版 4 調査前風景	48	写真図版19 大杉神社参道跡（2）	63
写真図版 5 作業風景・2号切岸	49	写真図版20 調査区外曲輪群（1）	64
写真図版 6 東側斜面土壙	50	写真図版21 調査区外曲輪群（2）	65
写真図版 7 1号曲輪	51	写真図版22 出土遺物 1 (縄文土器・陶器・石臼・鉄製品 1)	66
写真図版 8 2号曲輪	52	写真図版23 出土遺物 2（鉄製品 2）	67
写真図版 9 3号曲輪	53	写真図版24 出土遺物 3（錢貨 1）	68
写真図版10 4・5・6号曲輪（1）	54	写真図版25 出土遺物 4（錢貨 2）	69
写真図版11 4・5・6号曲輪（2）	55	写真図版26 出土遺物 5（錢貨 3）	70
写真図版12 4・5・6号曲輪（3）	56	写真図版27 出土遺物 6（錢貨 4）	71
写真図版13 7号曲輪	57	写真図版28 出土遺物 7（鐵滓・骨）	72
写真図版14 8号曲輪	58		
写真図版15 9号曲輪・作業風景	59		

＜表＞

第1表 遺跡一覧表	11	第6表 錢貨観察表（1）	36
第2表 土器観察表	33	第6表 錢貨観察表（2）	37
第3表 陶器観察表	33	第6表 錢貨観察表（3）	38
第4表 石製品観察表	33	第6表 錢貨観察表（4）	39
第5表 金属器観察表（1）	34		
第5表 金属器観察表（2）	35		



第1図 岩手県における遺跡の位置図



第2図 遺跡の位置図

I 調査に至る経過

柳沢Ⅱ遺跡は、国道45号山田道路建設事業の施行に伴い、その事業区域内に存在することから緊急発掘調査を実施することとなったものである。

三陸縦貫自動車道は、宮城県仙台市～岩手県宮古市の約220kmを結ぶ一般国道の自動車専用道路であり昭和62年に指定された全国14,000kmの高規格幹線道路網の一部をなすものである。

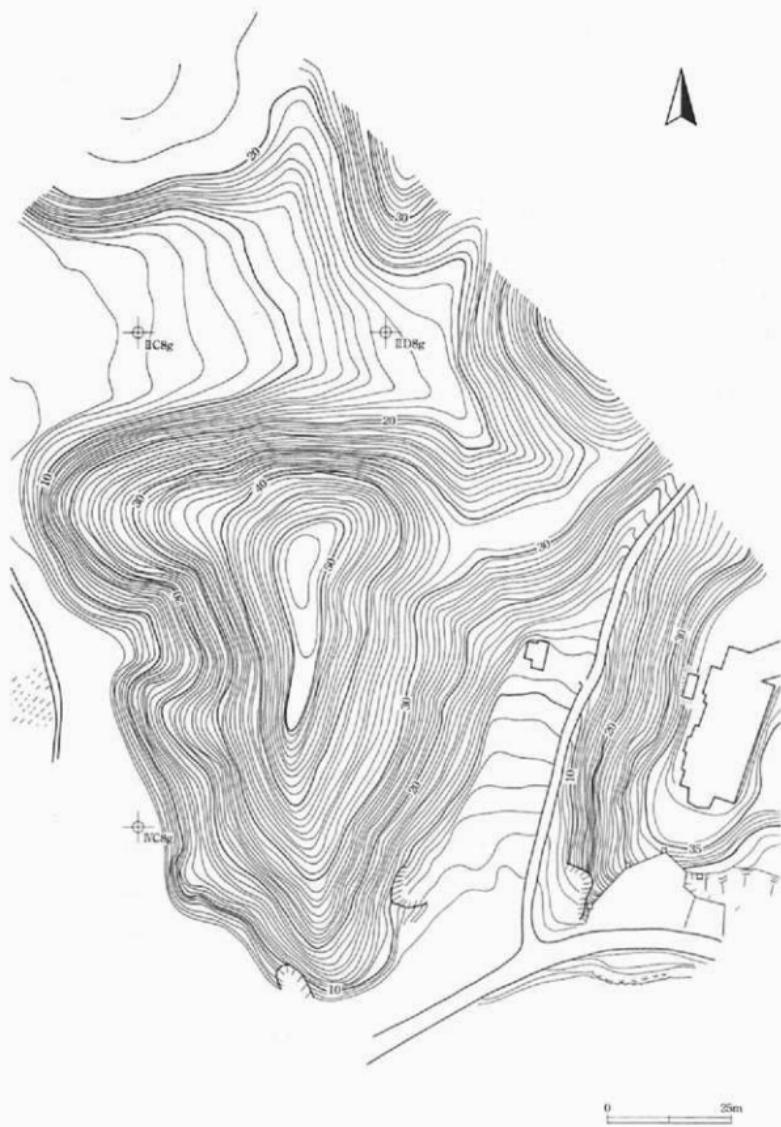
山田道路は、山田町閑谷と船越の間7.8kmの区間である。一般国道45号山田町市街地の年々増大する交通需要に対応するため、山田バイパスとして昭和62年度に事業化したが、同年6月に「三陸縦貫自動車道」の一部に指定されたため、昭和63年度に南側延長部も合わせて新たに事業に着手したもので、現在、高規格幹線道路として事業の促進を図っているところである。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と立地

(1) 位置と立地及び環境

当遺跡の所在する山田町は、岩手県最東端に接する鮎ヶ崎にも近く、地形図上では、国土地理院発行の5万分の1の地形図「土淵」「川井」「宮古」「鮎ヶ崎」「霞ヶ岳」「大槌」の図幅にまたがり、頂上では、東経141度57分、北緯39度28分に位置している。宮古から直線で南に約22kmの距離にあり、国立公園陸中海岸の中央部で、宮古市と釜石市のほぼ中间に位置する。北は宮古市、南西部は上閉伊郡大槌町、北西部は新里村・川井村に接し、東部は重茂半島と船越半島によって形成される山田湾・船越湾に接する。町の東西は約27km、南北は18kmある。北西、及び南西部は、北上山地からの支脈が伸び、急峻な山岳地帯を形成、その支脈の間を荒川・豊間根川が流れ、合流して、津軽石川となって宮古湾に注いでいる。閑口川・織笠川は山田湾に注いでいる。河川の原流地帯は、イヌブナの原生林が密生繁茂する。平野部は極めて少なく、山林・原野を合わせて山田町の面積の85%に達する。人口密度は、97.3人(昭和53)である。川の中・下流、河口の平地に田畠や集落が形成される。北部の豊間根・荒川は農業生産地、東部・東南部はリアス式海岸で、重茂半島・船越湾があり、海岸沿いの平地に集落を形成する。湾内においてはカキ・ホタテ・ノリ・ワカメなどの養殖漁業がさかんである。沖合は、親潮と黒潮が交差する日本最大の三陸漁場を形成し、スルメイカ・サンマ漁業の拠点である。交通は山田漁港近くの商店街を南北に国道45号とこれに平行するようになにJR山田線が延びている。船越半島は陸中海岸国立公園の中央に位置し、原生林の景観にすぐれ鳥獣類保護指定区である。また、タブの木の自生北限地で、県天然記念物に指定されている。気候は、海流の影響を受け暖冬涼夏で過ごしやすい。就業構造は、第1次産業が町経済の中心をなし、特に、水産業が中核であ



第3図 遺跡周辺の地形

る。昭和 47 年、国道 45 号が全面開通し、隣接市町村はもとより太平洋ベルト地帯への時間も大幅に短縮され、山田町の産業開発上大きな役割をはたしている。

明治元年、盛岡藩の白石転封に伴い、当町域の村々は松代藩取締となり、同 2 年江刺県、同 4 年盛岡県を経て同 5 年岩手県下となる。同 9 年上山田・下山田村が合併して山田村、織笠・森木村が合併して織笠村が成立し、同 12 年村々は、東閉伊郡に所属。同 22 年市制町村制施行により山田・飯岡村が合併して山田町、豊間根・荒川・石崎村が合併して豊間根村が成立し、大沢・船越・織笠村はそれぞれ一村で存続した。同 30 年下閉伊郡所属となる。1955 年（昭和 30）旧山田町と織笠・船越・豊間根・大沢の 4 村が合併（人口 24,604 人）して現在の山田町が成立した。面積は、263.33km²、人口は、24,154 人（昭和 40）・25,052 人（昭和 50）・21,214 人（平成 12）で、現在は矢巾町について県内の町村で第 4 位である。

（2）基本層序

柳沢 II 遺跡の調査範囲は、発掘調査時は笹叢でおおわれ、尾根南東側の斜面は杉の伐採跡となっている。調査区の頂上部分は、近世の大杉神社跡があり、参道を作ることで地形改変が行われている。参道は、左右に曲がりながら南側斜面から尾根伝いに続き、6 号曲輪から頂上部までは、ほぼ直線的に延びている。調査範囲の西側から南側は急傾斜で、崖になっていて、3 号曲輪、8 号曲輪では切岸が見られた。頂上部には、近世の盛土の下層に、人工的に盛土していることが確認され、中世の遺構面が見つかっている。1 号土坑は、現代のマツの切り株跡と見られている。曲輪は全体的に見て、南西侧斜面に盛土確認されている。5 号・6 号曲輪は、現代の電柱の埋設に関わって曲輪の擾乱も見られた。

全体的な観点から見ると、基本層序は 4 層からなっている。標高 35m 付近（補助点 1）の基本土層を見ると、下記の I 層から IV 層に大別される。

第 I 層：7.5 YR 4/2

灰褐色土の植根表土で、層厚は
3 ~ 20cm と薄くなっている。

第 II 層：10 YR 3/3

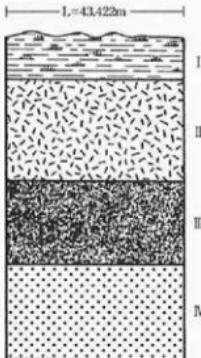
暗褐色土で、層厚は 0 ~ 50cm で
近現代の盛土も見られる。

第 III 層：10 YR 2/1

黒色土で、層厚は 0 ~ 40cm で、
中世の検出面である。

第 IV 層：2.5 YR 8/3

淡黄色土（真砂）で、層厚は
不明。風化した花崗岩で調査
区の基盤層である。



第 4 図 土層柱状図

2 歴史的環境

(1) 山田町の中世

鎌倉時代、源頼朝は奥州平泉の藤原氏平定後、職功によって多くの御家人たちに奥羽の没収地を割いて新しい所領として分け与えた。岩手県全体をみれば奥州總奉行と呼ばれた葛西氏をはじめ、千葉・和賀・稗貫・河村・工藤・滝石・阿曾沼・南部氏などがあり、いずれも鎌倉幕府の御家人に系譜をもとめられる。下閉伊地方に居住したと考えられる豪族たちの名をひろって見ると、河南閉伊氏の系統と考えられる豪族には、田舎・田代・赤前・根市・花輪・長沢・近内・腹帶・碁目・茂市・刈屋・和井内・船越・大沢・川井・箱石・河内・夏屋・大川・浅内・高浜・山崎・荒川氏などがあり、河北閉伊氏の系統とみられる豪族には、千能・近内・八木沢・津軽石・根井沢・江繁・小国・近能・黒田氏などがある。こうしてみると下閉伊地方の豪族・城館は、そのほとんどが閉伊氏にかかわるものであることがわかる。ただ、これらの豪族のすべてが室町・戦国時代に分立し、館を構築したものではなく、船越氏のように、南北朝時代すでに勢力をもっていたことに留意する必要がある。また、上記閉伊氏の系統に属さない豪族もあり、その中には豊間根氏などのように安倍氏に連なる系譜をもち、鎌倉時代まで遡りうる伝承を伝える豪族も存在していると述べている。(岩手県教育委員会 a 1986 : p 243)

源頼朝は、奥州合戦の功臣閉伊頼基を閉伊川の地頭とした。閉伊氏(佐々木氏)は最終的には閉伊川流域に定住することになるが、その途中一時、船越の地に留まつたという。閉伊氏が船越にたどり着いた時の様子は、「閉伊の内、沼田(船越)と言える所へ流人となり候處に、元来その家高きとて、村々の諸氏思ひつき馳せあつまりけり。則ち、沼田に仮屋を立ち往生す。一番に来たる士、船越守護昆小三郎、百九人にて來たり、二番目鎌笠守護田村八左衛門、八十一人にて來たり、三番大穂小穂両守護、五十八人にて來たり、四番金沢三吉、五十四人にて來たり、その他、諸士思ひ思ひに来て、すべて人数千七百五十九人集まる」と伝えられている(阿部家伝)。この一族中の何人かが残り、沼田の地を開拓し、船越氏と称し、船越館を築いたという。船越田ノ浜には閉伊頼基の墓所や宝治元年(1247)創建といわれる荒神社がある。また鎌倉末期、閉伊氏から分立した大沢氏は大沢河原(大沢)沿いの原野を拓き牧場の経営を始めたとされたと述べている。(岩手百科事典 a 1978 : p 1055)

船越の所領は南北朝時代には誰の知行地であったか、閉伊氏の治下であったか、阿曾沼氏の治下であったかさだかでない。しかし、海藏寺の板碑より察するに有力なる土豪のいたことは間違いない。また豊間根『阿部家伝』に、「頼朝より三代目実朝の御代に佐々木太郎二男次郎二人、閉伊の内沼田といえる所へ流人となり下り候處に、元来その家高きとて、村々の諸氏集まりけり。則ち沼田に仮屋を立て住す。」と以下、上記記述の人数が集まる。沼田というのは、船越台地と半島部との間に出来た低湿地のことで、往時は、ここに多くの沼があつてその沼べりを開田したことからこの名で呼ばれるようになったと思われる。佐々木(閉伊氏)のもとに集まつたという土豪はほとんど船越を中心とした周辺の者たちである。閉伊氏は、鎌倉時代のはじめ気仙地方から点々と飛び石伝い北上して、最後に閉伊川流域に定住することになったのである。その途中、一時、この船越の地にも足を止めていた時代があるとされている。(宮古地方の中世史古城物語)

閉伊氏は、次に南北朝時代に船越館主なる有力な土豪阿曾沼氏と共に、北畠頼家の傘下として忠勤をはげみ後文中2年(1373)北畠頼成を招請、船越御所として底謹奉仕している。天文19年(1550)九戸政実の

叛乱のときはその討伐に船越党として四戸陣に参加して功績をあげている。慶長5年(1600)10月、和賀氏の残党、反乱につき船越党參陣している。このように船越の豪族は代がかわり世がかわっても、累代豪族として「知仁勇」の三徳の道を尽くしてきた。閉伊氏の祖、頼基を葬った地といわれている。(下閉伊都誌)この神社の神殿の中には、「右に領西八郎為朝、左に閉伊陸奥守頼基二体あり、衣冠正しく通常人の大きさなる御本像にして実に人目を驚かし程の美麗なる御姿形にて、東奥の僻地には珍しい御尊像と押し奉る。神社より一丘高く、海辺に南面せる約4坪の所に切り石にて権をめぐらしその中に閉伊陸奥守頼基の心靈の碑あり。」とある。(黒森顕彰会報)

累代の豪族はそれぞれ三徳を備え、海の幸山の幸は豊かなれども、五穀は少ないが、隣村の貢納により十分と考えられ、北畠氏が難をこの地方に避けるには適していたのかもしれないと思われる。(山田町教育委員会 a 1991 : p 258 ~ p 259)

14に余る津軽郡の文献を調査考証をしていくうちに、北畠氏は、閉伊郡船越から津軽郡浪岡に移行した事は事実と見る。特に、『郡中名字』(天文年間津軽郡)の中に重臣本多侍として、船越氏、大浦氏が見えるのは、浪岡と船越が深いかかわりをもつものとして意義深いものがある。船越地域として、北畠氏と係りのあるものには、船越御所跡、海蔵寺寺伝には、古野朝時代船越御所の祈願所として山城櫻城の大覚寺の月海山正覚寺と称する真言宗の寺院があった事、小田の御所に、吉野朝のころの哀愁漂う歌碑があったこと(今これはいずれに運び去られたかない)上館に古碑が現存しているが、文字は流れでいて見えなくなっていると述べている。(岩手県教育委員会 b 1991 : p 261 ~ p 262)

応永26年(1419)南部蘿摩守政光からその子修理亮に宛てた文書の中に「八戸郷の内、その外、岩手の平館、山北の長野、淀河、へいの飯岡(閉伊の飯岡)この間の如く上をば修理之亮の計らいたるべく候」とあり、室町期の中ごろの飯岡は八戸南部氏の所領管理のための代官が飯岡氏であると言われる。永亮11年(1439)福士庄次郎安定は南部14代義正の時、閉伊郡の内、山田、飯岡、大沢、織笠の4か村を給せられた。これより家名を改め織笠と号したといわれる。保定は立神館に拠って大庭氏に備え、背後の飯岡館に一族をすえた。天正11年(1583)弘川館主一戸行重が千徳館において説教された時、重臣石崎八郎、荒川佐助は討死した。安倍一族の末裔石崎八郎は石崎・豊間松岡村、近江浪人佐々木(荒川)佐助は荒川村の領主であったとされていると述べている。(岩手百科事典 b 1978 : p 1055)

(2) 山田町内の中世城館遺跡

当山田町内には中世城館が22箇所に存在が知られている。その中から5つの館を紹介しておきたい。

小田の御所 下閉伊郡山田町大字船越

小田の御所は、船越半島の南西端、船越湾に突き出した標高約80mの丘陵上にあり、田の浜集落の南方約500mに位置する。自然地形を巧みに利用した要塞度の高い館で、館の周囲の狭い山間はそのまま自然の堀の役割を果たしている。主郭の標高は、78.9mで、東西28m、南北14mの楕円形をし、そのほぼ中央に8個の礫石が遺存している。二の郭は主郭の前方北側に設けられ、南北約43m、東西約32mの規模をもっている。二の郭は主郭と接する個所に土盛りした塗があり、10個の礫石と文化年間建立の二つの宝珠印塔が残されている。三の郭も二の郭前方北側に東西26m、南北24mの規模で構築されている。これら階段状の三つの郭の周囲には広い腰壁が巡らされ、その北西部にも一つの宝珠印塔が建てられている。小田の御所は船越御所と同様、船越氏が北畠頼成一行庇護のために造ったものとして伝えられており、とりわけ駿

時に備えた臨時の館の機能をもっていたと考えられていると述べている。

船越御所 下閉伊郡山田町大字船越 10

船越御所は、船越東館とも呼ばれ、西方に所在する船越館（西館）と対峙している。JR山田線船越駅の東方約600mに位置し、船越半島のくびれに突き出した独立丘陵上に立地する。構造は、単純な单郭式で、主郭の標高は約15mであり、長軸約130m、短軸約60mのやや歪んだ隅丸長方形を呈する。南方の海側は急峻な崖となっており、東と北側の斜面を削り、東に二重、北に一重の腰郭をつくり出している。東側の低い腰部の南端には八幡宮が祀られ、杉や古木が立っている。館の北の平地は中館と呼ばれ、小森の中に熊野神社がある。また、この中館との境には空堀の跡と考えられる凹地が部分的に残されている。館の北西には海藏寺があるが、旧地は、船越御所の祈願所で、月海山大覚寺と称する真言宗の寺院であったとされている。館主については明らかではないが、北畠頼成一行が船越に落ちて来た際、閉伊氏の一族である船越氏が一行を庇護するために築城したものと伝えられていると述べている。

曾伊館 下閉伊郡山田町大字豊間根 19

曾伊館は、JR山田線豊間根駅の南西約1.2kmに位置し、豊間根川と荒川川に挟まれた金田森の山塊から東に伸びた支脈、標高約130mの丘陵上に立地する。主郭は南北26m、東西22mのほぼ円形を呈し、その中央にはかつての館神であったと考えられる曾伊八幡宮の小祠が祀られている。主郭の前方北側には南北41m、東西約25mの二の郭があり、そのさらに前方には南北47mで最も長くなる三の郭が構築されている。なお、尾根なりに階段状に設けられた三つの郭のほぼ全体に狭い腰郭がめぐらされている。主郭の背後は深い空堀で切断され、その外側には、砦状の平堀がつくられている。曾伊館の館主豊間根氏は、豊間根系図によれば安倍一族で、安倍貞任の弟正任の子安倍七郎孝任が初代とされている。本館は、その10代目安倍宣任が藤森の館から移って居住し、以来25代茂任まで拠点になっていたと伝えるが、その構造などからみて戦国時代頃の構築と考えられていると述べている。

立神館(織笠館) 下閉伊郡山田町大字織笠 16 - 23

立神館は織笠館とも呼ばれ、JR山田線織笠駅の西方1.2kmにある靈巣集落背後の丘陵上に構築されている。主郭は標高50mの最高部にあり、南北約60m×東西約35mの長方形を呈する。主郭には腰郭がとりつき、一段低い前方東側には空堀で区画した二の郭が設けられている。二の郭は東西約60m、南北約70mの長方形で、西の端の微高地に館神が祀られている。三の郭は二の郭の北東側に空堀で隔ててつくられ、南北約50m、東西約40mの規模をもっている。二の郭・三の郭には尾根沿いに大きな腰郭が設けられ、そのくびれの部分に大手口が存在する。基部は広くて深い空堀で切って背後の通路を断っている。立神館の館主は織笠氏で、「系胤譜考」の織笠氏の系譜によれば、永享11年(1439)に福士床次郎安定が南部義政より織笠村等を賜って織笠氏と称したとされている。なおこの織笠安定は、信仰心の厚い人であったといわれ、本館の近隣に竜泉寺を開祖したほか、先祖を祀るために八幡宮を建立していると述べている。

織笠館 下閉伊郡山田町大字織笠 4

織笠館は坊主館とも呼ばれ、JR山田線の織笠駅の西方約1kmに位置する。草木山の山塊が北西に突き出した丘陵上に立地し、北側の麓を織笠川が流れている。主郭は標高41mを測り、東西47.5m、南北40mのほぼ円形を呈する。その前方西側には径23mほどの小規模な副郭が設けられ、主郭、副郭の全体に広い腰郭が巡らされている。また、副郭の前方西側や主郭南東、背後の丘陵に連なる尾根上には、さらに、二・三段の小規模な腰郭がとりつく。背後の丘陵とは広い空堀で切断されているが、今は新田集落に通じる道路

となっている。本館の麓を東流する鐵笠川は約1.2km下流で山田湾に注ぎ、館の全面には鐵笠川沿いの平野が広範囲に広がっていることから、漁業及び農業を管理するうえで格好の適地となっている。館主は田村氏といわれており、疊間根家の『阿部家伝』によれば、閉伊氏が鐵倉時代のはじめ船越に移住してきたとき、鐵笠守護田村八左衛門が81人の家来とともに挨拶に参上したと伝えられていると述べている。(岩手県教育委員会 b 1986: p 247 ~ p 249)

(3) 柳沢Ⅱ遺跡の概要

柳沢Ⅱ遺跡は、地形図から見ると、国道45号沿いに面し、道路向い側に、山田湾が広がっている。山田北小学校が西側2kmの所にあり、周辺は、住宅地が広がっている。遺跡の標高は、約52mで、遺跡周辺は、急勾配の山林と荒廃地であった。南側に延びる40mの尾根と、調査区外で北西側に40m延びる尾根がある。遺跡の現況は山林であるが、頂上部に詞があり、江戸時代の大杉神社(当地的鎮守)の旧社地を含んでおり、尾根伝いには、参道の跡が残っている。今回は、東端よりの8,400mについて調査をした。南東側は、伐採された急斜面で、南から北西側にかけては、被覆が広がっていた。

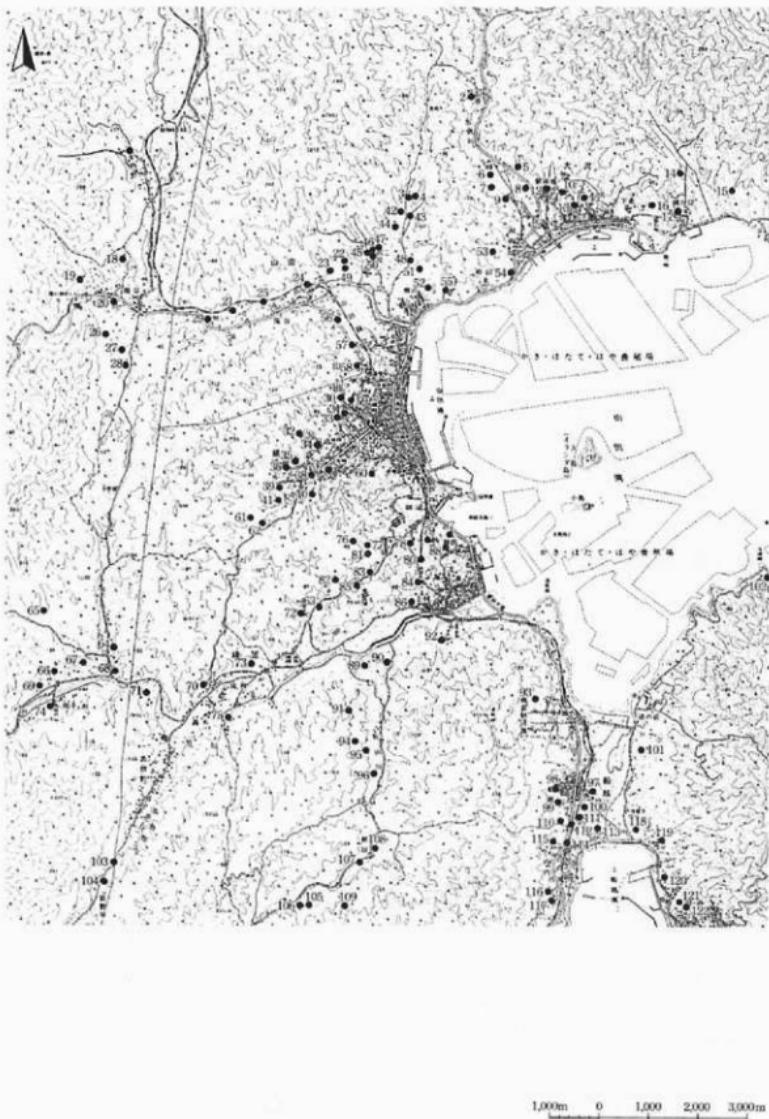
山田町で作成されている主に、北海道・東北に襲来した津波年表によると、貞観11年(896)から昭和48年(1973)までの間に記録に残されているだけでも過去46回の地震が起きており、地震地帯、津波の常習地帯であると述べている。(山田町教育委員会 1982: p 825 ~ p 835)

発掘調査により、土坑1、土塁1、曲輪9、切岸2の遺構が検出され、曲輪、土坑から、釘、寛永通寶の古錢、鐵滓、少數の土器破片が出土した。ほとんどの曲輪が、南東から西にかけて発見された。参道は地形改変をして作られていた。城館に伴う通路は今回の調査では、はっきりしなかった。虎口については、大杉神社への参道であった小道(調査区南側からのびている道)がもっとも有力である。この城館に至るルートは、南側の麓より登路し左右に曲がりながら、尾根中腹まで上がり北に進むコースと、調査区外の北東側より上るコースの可能性が考えられる。崖根北端部には堀切と曲輪も確認されたが、調査区外でもあり、曲輪等の遺構であると判断するまでには至らなかった。本遺跡の発掘調査により、近隣の遺跡との関係や歴史を紐解くうえで一つの手がかりになれば幸いである。

こうして、「柳沢Ⅱ遺跡」をみると、館主などの伝承が一切残っていないこと、発見された遺構がほとんどが曲輪であり縄文時代からの生活遺物が少ないと、常に生活の根拠地としていた痕跡がないことなどの特徴がある。館主が支配関係により構築した城館というよりは、戦いの際に一時的に使用した居城の性格をもつ城館の姿を想定することができそうである。今後、近隣の沿革誌や、貴重な文献等が見つかれば更に新たな事実が明らかになると考えられる。

<参考文献>

- 鈴木恵治(1985):「山田町」「日本地名大辞典」角川書店
- 水沼英三(1978):「山田町」「岩手百科事典」岩手放送
- 山田町史編纂委員会(1991):「山田町史 中巻」山田町教育委員会
- 山田町津波誌編纂委員会(1982):「山田町津波誌」山田町教育委員会
- 岩手県教育委員会(1986):「岩手県の城館跡」「岩手県中世城館分布調査報告書」岩手県教育委員会



第5図 周辺の遺跡分布図

第1表 遺跡一覧表

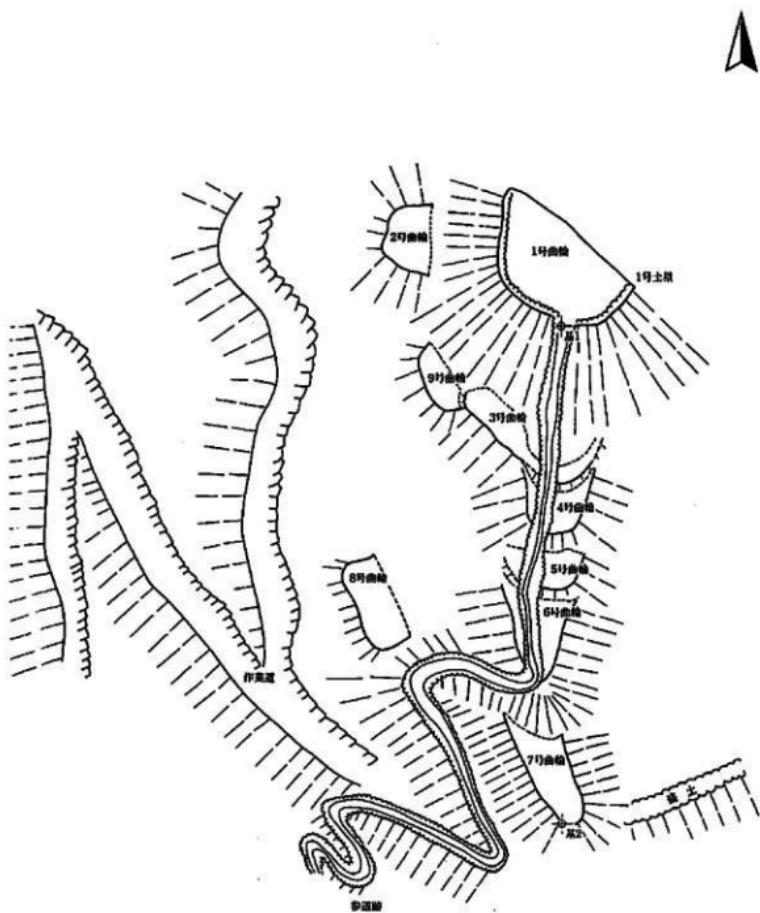
No.	遺跡名	種別	時代	遺構遺物	所在地
1	内野	集落跡・製鉄跡	縄文	縄文土器・土師器、羽口、铁滓	山田町第20地割内野
2	山谷	散布地	縄文	縄文土器	大沢山谷
3	間木戸IV	集落跡・一里塚	縄文・近世	縄文土器・一里塚	山田第3地割
4	間木戸V	散布地	縄文	縄文土器	山田第3地割
5	新開地II	散布地	縄文	縄文土器	大沢新開地
6	川向Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	大沢川向
7	川向Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	大沢川向
8	新開地I	散布地	縄文	縄文土器	大沢新開地
9	川向I	散布地	縄文	縄文土器	大沢川向
10	大沢館	城跡跡	中世	主郭、護郭、二重・三重空堀	大沢第6地割
11	紅山B	集落跡	縄文	縄文土器	大沢紅山
12	新開地	散布地	縄文	縄文土器、石器	大沢新開地
13	紅山A	集落跡	縄文	縄文土器	大沢紅山
14	浜川目沢田Ⅳ	集落跡	縄文	縄文土器	大沢浜川目
15	多門	製鐵跡	縄文?	スラッグ	大沢浜川目
16	浜川目沢田I	集落跡	縄文	縄文土器	大沢浜川目
17	浜川目沢田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後・晚期)	大沢浜川目
18	岡口I	集落跡	縄文	縄文土器、土師器	山田第19地割岡口
19	岡口II	散布地	縄文	縄文土器	山田第19地割岡口
20	上野畠	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	山田第19地割岡口
21	岡谷八	散布地	縄文	縄文土器	山田第17地割
22	房の沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	山田第14地割
23	房の沢II	散布地	縄文	縄文土器	山田第14地割
24	房の沢I	散布地	縄文	縄文土器	山田第14地割
25	岡谷I	散布地	縄文	縄文土器	山田第15地割
26	上野台II	散布地	縄文	縄文土器、土師器、須恵器	山田第18地割岡口
27	上野台I	散布地	縄文	縄文土器	山田第18地割岡口
28	上野台Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	山田第18地割岡口
29	山田館	城跡跡	中世	主郭、二の郭、護郭、空堀	山田第17地割
30	長崎II	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第9地割
31	長崎III	城跡跡	中世	主郭、護郭、空堀	飯岡第8地割
32	小沢I	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第8地割
33	長崎IV	城跡跡	中世		飯岡第8地割
34	小沢II	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第7地割
35	大畠II	散布地	不明		飯岡第6地割
36	大畠I	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第6地割
37	鶴岡(坂越跡)	城跡跡	中世	主郭、護郭、空堀	飯岡第6地割
38	坂越IV	散布地	縄文		飯岡第6地割
39	長野I	散布地	縄文		飯岡第6地割
40	坂越II	城跡跡	中世		飯岡第5地割
41	長野II	散布地	縄文		飯岡第6地割
42	間木戸I	散布地	縄文	縄文土器	山田第3地割
43	間木戸II	散布地	縄文	縄文土器	山田第3地割
44	間木戸III	散布地	縄文		山田第3地割
45	沢田I	集落跡	縄文	縄文土器、土師器	山田第14地割
46	沢田II	散布地	縄文	縄文土器	山田第4地割
47	沢田III	散布地	縄文	縄文土器	山田第4地割
48	静沢IV	散布地	縄文	縄文土器	山田第1地割
49	房の沢IV	散布地	縄文	縄文土器	山田第14地割
50	沢田IV(沢田Ⅲ)	散在地・城跡跡	縄文・中世	縄文土器、主郭、護郭、空堀	山田第4地割
51	静沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	山田第1地割
52	静沢II	散布地	縄文	縄文土器	山田第1地割
53	寺田II	散布地	縄文	縄文土器	大沢寺田
54	寺田I	散布地	縄文	縄文土器	大沢寺田
55	静沢I	散布地	縄文	縄文土器	山田第1地割
56	岡谷Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第9地割
57	岡谷V	散布地	縄文	縄文土器	
58	八幡館	城跡跡	中世	主郭、護郭、空堀	八幡町第7地割
59	長崎I	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第10地割
60	坂越Ⅲ	散布地	縄文		飯岡第2地割
61	赤松I	散布地	縄文		飯岡第6地割
62	赤松II	散布地	縄文		飯岡第6地割
63	龍泉寺一里塚	一里塚	近世		龍泉寺礼堂
64	白石II	散布地	縄文	縄文土器	飯笠白石
65	田代茂	集落跡	縄文	縄文土器、土師器、灰釉	飯笠白石
66	日当II	散布地	縄文	縄文土器	飯笠白石
67	白石III	散布地	縄文	縄文土器	飯笠白石

No.	遺跡名	種別	時代	遺物	所在地
68	白石 I	散布地	縄文	縄文土器	越笠白石
69	集落跡	縄文		縄文土器、弥生土器、鐵滓	越笠白石
70	宿神	集落跡	縄文	縄文土器（後期）、土師器	越笠宿神
71	創立	集落跡	縄文	縄文土器、鐵滓	越笠創立
72	礼堂	散布地	縄文	縄文土器	越笠礼堂
73	鹿苑跡	城館跡	中世	主郭、二の郭、廻廊、空堀など	越笠鹿苑
74	日陰	散布地	縄文	縄文土器	越笠日陰
75	古木	集落跡	縄文	縄文土器（中期）、土師器	越笠古木
76	細浦 II	散布地	縄文	縄文土器	越笠細浦
77	細浦 I	散布地	縄文	縄文土器、弥生土器、土師器	越笠細浦
78	細浦 IV	散布地	縄文	縄文土器	越笠細浦
79	細浦 VI	散布地	縄文	縄文土器	越笠細浦
80	細浦 V	散布地	縄文	縄文土器	越笠細浦
81	細浦 III	散布地	縄文	縄文土器	越笠細浦
82	後山 I	集落跡	縄文	縄文土器、弥生土器、土師器	越笠
83	後山 II	散布地	縄文	縄文土器、土師器、石斧	越笠
84	上	集落跡	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器	越笠
85	後山 III	散布地	縄文	縄文土器	越笠細浦
86	上村	散布地	縄文	縄文土器	越笠
87	麻浜 I	散布地	縄文	縄文土器	越笠
88	麻浜 II	散布地	縄文	縄文土器	越笠
89	坊臼山 II（-III）	城館跡	中世	主郭、廻郭、堀	越笠新田
90	越田	城館跡・貢塚	縄文	縄文土器、土師器、貝類	越笠新田
91	坊主山 I	集落跡	縄文	縄文土器	越笠坊主山
92	草木	散布地	縄文	縄文土器	
93	長林	散布地	縄文	縄文土器	船越長林
94	根井沢Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器、土師器	越笠新田
95	根井沢Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	越笠新田
96	根井沢 I	散布地	縄文	縄文土器	越笠新田
97	船越II	城館跡	縄文	縄文土器、主郭、帝郭	越笠細浦
98	船越 I	散布地	縄文	縄文土器	船越
99	船越 II	散布地	縄文	縄文土器	船越
100	南台 I	集落跡	縄文	縄文土器	船越南台
101	新道貝塚	貝塚	縄文	縄文土器、鐵滓	船越入江田
102	大浦跡	口原・生産跡	縄文	縄文土器、焼石、灰	大浦
103	荻野平 I	集落跡	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器	越笠荻野
104	荻野平 II	集落跡	縄文	縄文土器	越笠荻野
105	天王平	集落跡	縄文	縄文土器、弥生土器、鐵滓	越笠新田
106	猿塩沢	散布地	縄文	縄文土器	越笠新田
107	山波	散布地	縄文	縄文土器（早・中期）	越笠新田
108	新田 II	散布地	縄文	縄文土器、土師器	越笠新田
109	大石平	散布地	縄文	縄文土器（後期）、石斧	越笠新田
110	船越西館	城館跡	中世	主郭、廻郭、空堀、堀	船越第4地割
111	灣台 II	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）	船越湾代
112	灣台 III	散布地	縄文	縄文土器	船越湾代
113	灣台 IV	散布地	縄文	縄文土器	船越湾代
114	山ノ内 I	城館跡	中世	船越山の内	
115	山ノ内 II	城館跡	縄文	縄文土器	船越山の内
116	山ノ内 III	城館跡	縄文	縄文土器	船越山の内
117	高ノ沢	散布地	縄文	縄文土器	船越山の内
118	船越御所	城館跡	縄文	主郭、廻郭、空堀、堀	船越第10地割
119	岩ヶ沢	集落跡	縄文	縄文土器	船越岩ヶ沢
120	早川	集落跡	縄文	縄文土器	船越岩ヶ沢
121	田の浜館	城館跡	中世	主郭、廻郭、空堀、堀	船越第12地割
122	大利貝塚	貝塚・集落跡	縄文	縄文土器	船越田の浜

<参考文献>

大道篤史 1998:「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告集第287集 房の沢IV遺跡」

国土地理院 1987:「陸中山田1/25,000地形図」(第5回周辺の遺跡分布図)



基 1	X = - 57,770.000
	Y = 96,770.000
基 2	X = - 57,830.000
	Y = 96,970.000



第6图 造桥配图

III 調査方法と室内整理

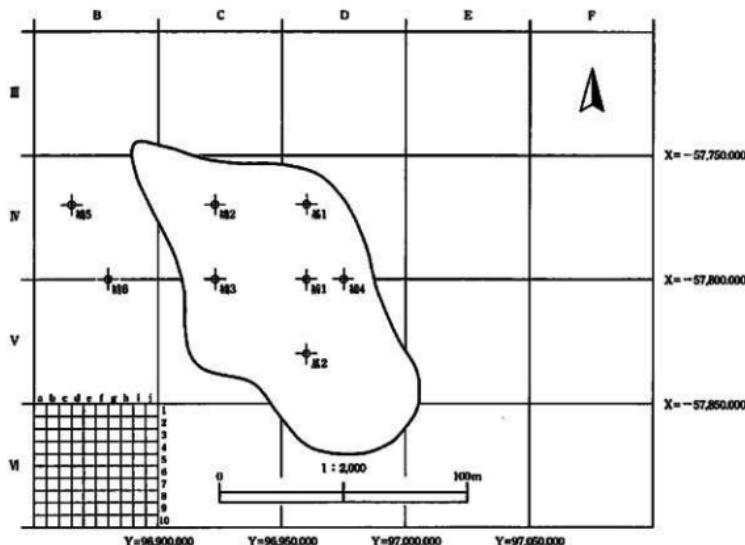
1 野外調査の方法

(1) 調査区のグリッド設定

グリッドの設定にあたっては、平面直角座標第X系を用いた。座標原点は、 $X = -57,750.000$ 、 $Y = +96,875.000$ である。この座標原点から遠跡全体を一辺50mの大グリッドに区画し、原点から東方向へはアルファベットの大文字A～Y、南方向へはI～Vの番号を付し、これを組み合わせて北西隅を基準点に、IV C、VDというように表示した。小グリッドは大グリッドを10等分して 5×5 mに区画し、東方向へはa～j、南方向へは1～10を付している。調査区の名称は、大区画と小区画の組み合わせでIV C 6 g、V D 2 bというように呼称している。

各基準点の成果値と杭高(標高)は次の通りである。

基準点1	$X = -57,770.000$	$Y = +96,970.000$	$H = 45.598\text{ m}$
基準点2	$X = -57,830.000$	$Y = +96,970.000$	$H = 27.813\text{ m}$
補助点1	$X = -57,800.000$	$Y = +96,970.000$	$H = 37.442\text{ m}$
補助点2	$X = -57,770.000$	$Y = +96,933.000$	$H = 27.454\text{ m}$
補助点3	$X = -57,800.000$	$Y = +96,933.000$	$H = 20.956\text{ m}$
補助点4	$X = -57,800.000$	$Y = +96,985.000$	$H = 28.999\text{ m}$
補助点5	$X = -57,770.000$	$Y = +96,875.000$	$H = 2.078\text{ m}$
補助点6	$X = -57,800.000$	$Y = +96,891.000$	$H = 2.104\text{ m}$



第7図 グリッド配置図

(2) 粗掘りと遺構検出・遺構精査と遺物の取り上げ

雑物撤去と刈り払い作業から開始し、トレーナによる試掘、遺構検出、精査の順に進めた。急斜面のため重機が使えなかった。表土が15cm前後の厚さで、粗堀から人力により調査を実施した。

検出された遺構は、曲輪は適宜土層観察用のベルトを残し、土坑は2分法を原則として精査を行い、必要に応じて適宜併用している。記録として、必要な図面および写真撮影は、精査の各段階において行ってい る。

調査時点での現況図の作成は写真測量より行い、各々の遺構は従来の簡易的な造り方測量で行った。また、曲輪、土坑、土塁については、光波トランシットによる測量で平面図を作成した。実測図の縮尺は、断面図は1/20を基本として作成し、平面図は1/40を基本として作成した。遺跡周辺の地形図は1/1000、遺構配置図は1/200、絶縁図は1/1000で作成した。

遺構内の出土遺物は、埋土の場合は、上部・下部に分けて取り上げ、床面及び床面直上の遺物は、必要に応じて番号を付し、写真撮影・図面作成後に取り上げた。

本遺跡は、IV～VのC～Dのグリッドが中心の遺構である。

(3) 写真撮影

野外調査では6×7cm判カメラ1台（モノクロ）と35mm判カメラ2台（モノクロ、カラー・リバーサル）を使用し、遺構・遺物の検出状況や出土状況を必要に応じて撮影している。他にボラロイドカメラ1台をメモ的な用途として使用した。撮影にあたっては、撮影状況を記録した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。また、調査終了時には、小型飛行機で空中から撮影した。

2 室内整理の方法

室内整理は遺物の水洗い・注記から開始し、遺物実測、拓本、遺構・遺物トレース、遺物の写真撮影、遺構・遺物図版、写真図版の順に作業を進めた。これらの作業と平行して遺物の計測、原稿の執筆、各種の確定・分析を行い報告書に掲載している。

(1) 遺構

- ① 遺構図面は、点検後必要に応じて第2原図を作成した。各遺構の断面図、平面図を点検・トレースをした。また、参道跡の平面図は、遺構配置図を利用して第2原図を作成した。遺構配置図は、曲輪、土坑、土塁のそれぞれに縮尺のスケールを付している。断面図中の石はSで図示している。
- ② 本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は、平面直角座標第X系による座標北を示す。
- ③ 基本土層断面図には、ローマ数字を、遺構内の土層は算用数字を用いている。

(2) 遺物

全体の遺物量が少ないとや小破片のものが多いことから、実測・拓本の必要のないものは写真撮影にとどめている。土器には、完形品や復元可能なものがなかったため適宜、拓影と断面実測を行った。石器およ

び石製品、鉄製品については出土したすべてを記載した。

掲載遺物の図版の縮尺率は、次の通りである。土製品、陶磁器、石製品、鉄製品が2/3、金属製品（釘、鍵）は原寸大である。遺物の大小に応じては適宜縮尺を変え、図版ごとにスケールを付してある。



第8図 總盤図

IV 検出遺構と出土遺物

本遺跡からは、遺構として曲輪9ヶ所、土坑1基、土塁跡1基、切岸2ヶ所、が検出された。遺物は曲輪、土坑から、釘、寛永通寶の古錢、鉄滓、少數の土器、陶磁器破片、石臼が出土した。

1 曲輪

尾根上に連続して階段状に9箇所確認している。尾根上部の平場は、北東側の高い部分の土を削り南西側斜面に盛土を施して作られ、規模は20×30mである。特に1号、3号、4号、5号、6号、7号曲輪は、南東側に広く、大杉神社への参道は、7号曲輪を除き、これらの曲輪を南北に横断する様に作られている。

1号曲輪（第9図、写真図版7、22、23、26、28）

＜位置＞ 調査区IVD 1 a～IVD 5 eグリッド、標高45.598m付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約19.5m、短軸10.5m、面積約102.375m²で、南側尾根頂上付近である。近世の盛土、中世の盛土、自然堆積の順に層が重なっている。切り出し、盛土の状況から、曲輪北東側を削って平坦とし、その土を南西側に盛った結果、このような平坦地がつくられたものと思われる。自然地形では、幅10m程度であったと考えられるが、削平盛土の結果、幅約20m程度にまで広がっている。断面観察により、近世の盛土の下層に、人工的に盛土していることが確認されるため、中世の遺構と判断した。

＜埋土＞ 切り出し部は、表土（腐葉土）直下に真砂の層、盛土上部は、近世の盛土層の下に真砂の基盤層が見られる。

＜出土状況＞ 寛永通寶の錢（無背錢46）、釘（7～18）、十手（19）、鉄滓（67、68）が出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが時期の特定はできない。

2号曲輪（第10図、写真図版8、24、26、27、28）

＜位置＞ 調査区IVC 1 g～IVC 3 iグリッド、標高38.098m付近

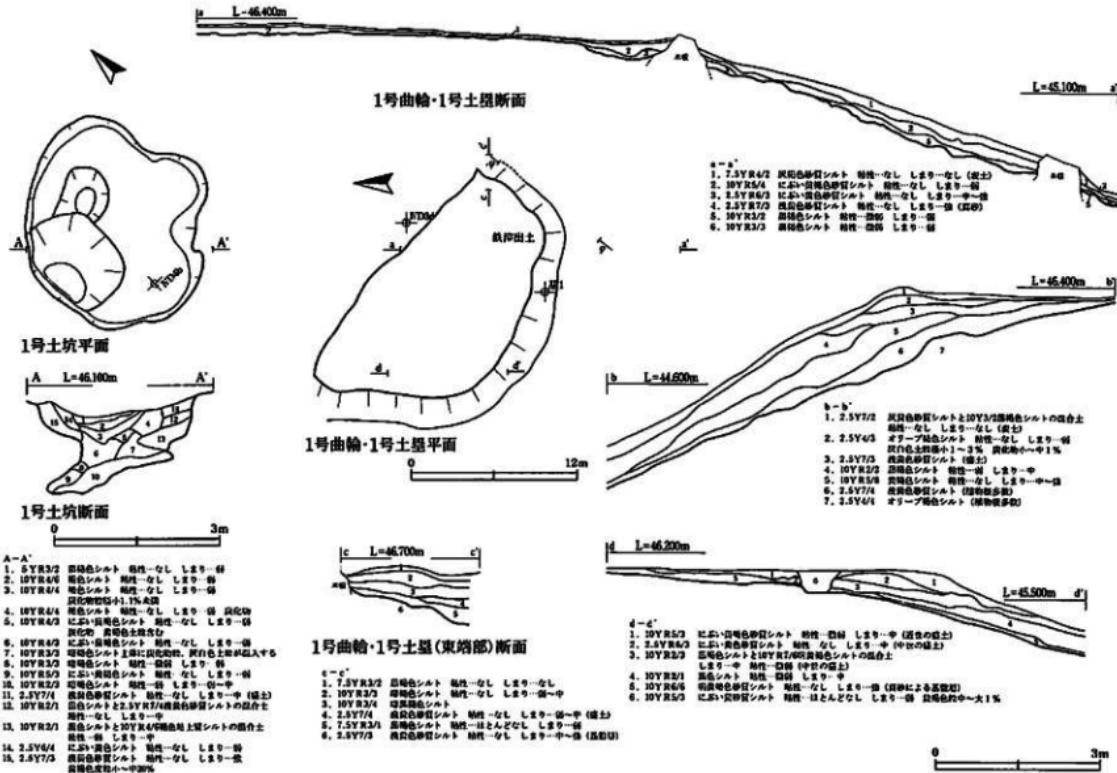
＜規模・形態＞ 規模は、長軸約9m、短軸4.5m、面積約40.5m²で、1号曲輪より約7.5m程西に下がった所である。平面形は、半円状をなしていない、格列等は確認していない。整地の状況から判断して、自然地形を利用して、若干の盛土を行うことにより、平坦地を作ったものと考えられる。

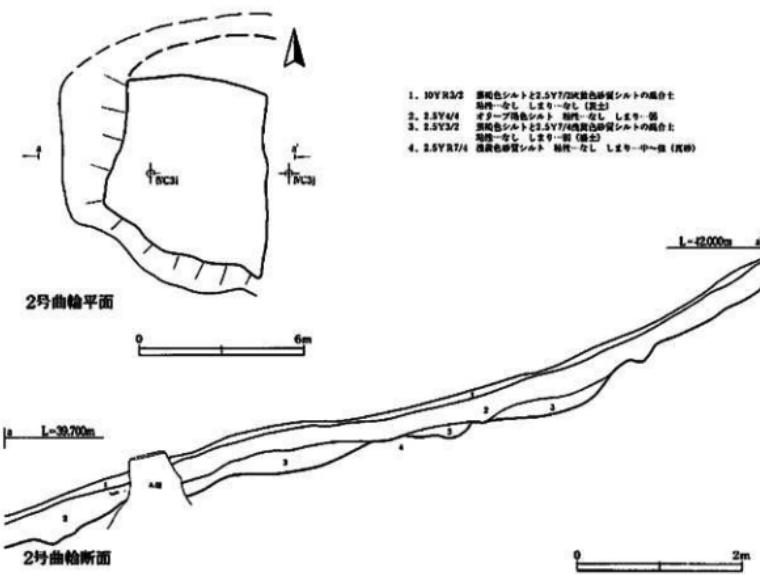
＜埋土＞ 表面は褐色がかっていて、盛土を行ない整地したと考えられる部分は、黒褐色と灰白色の混合土でII層の下に確認される。若干の炭化物（粒径中～大）がみられる。

＜出土状況＞ 寛永通寶の錢（元の字入り24、文の字入り29～30、無背錢47～59）、縄文時代の深鉢の口縁部の破片（2）が第II層から、哺乳類の動物の骨（69）が出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

第9回 1号曲輪・1号土坑・1号土塁





第10図 2号曲輪

3号曲輪（第11図、写真図版9、27）

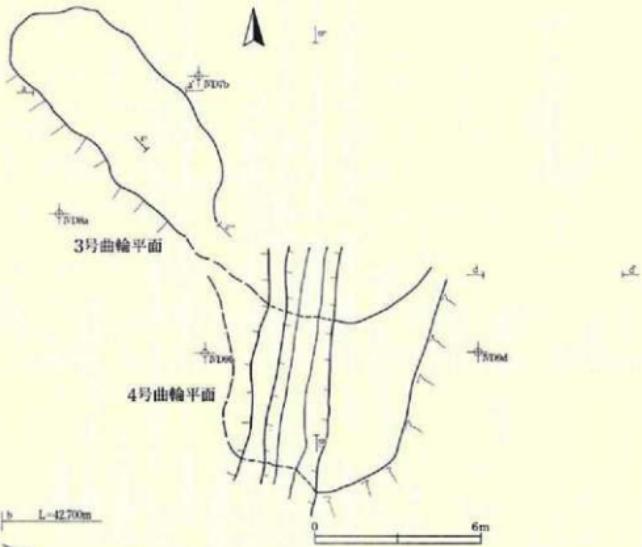
＜位置＞ 調査区IV C 5 i～IV D 7 c グリッド、標高 40.598 m付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約 19.5 m、短軸 9 m、面積約 87.75m²で、1号曲輪より約 10 m 程南に下がった所である。参道を挟んで東西に広がっている。1号曲輪直下部分で、黄褐色土層を切り出し、曲輪部分の主に南西側に盛土していることが確認された。切り出した斜面は、傾斜をさらに増し、切岸（状）をなしている。平坦部は、尾根部を通り、東側斜面にまで続いている。2号曲輪、9号曲輪とほぼ同一レベルであり、これらを合わせて、帶曲輪的様相をみせている。

＜埋土＞ 南西側斜面部分は、1号曲輪直下において、黄褐色土を主体とする地山基盤層を形成している。粘土質層ではないが他の区域と比べ東側斜面部分では、灰白色と黒褐色の混合土が盛土層となっている。層序に関しては、基本的に他とかわりない。

＜出土状況＞ 寛永通寶の錢（無背銭 60～63）が出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

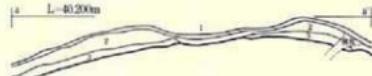


第11回 3号曲輪・4号曲輪

3号·4号曲輪付近断面

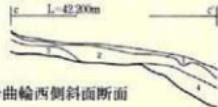
- b-5

 1. 7.5YR 4/2 桃色シルト 粘性-なししまり-なし。
 2. 7.5YR 2/2 黄褐色シルト 粘性-なししまり-ほとんどなし。
 3. 2.5YR 4/2 桃色シルト 粘性-微弱しまり-弱中灰白色土層細小%。
 4. 2.5YR 4/2 草葉色の桃色シルト 粘性-なししまり-中。
 5. 3.0YR 4/2 桃色シルト 粘性-強しまり-弱中灰白色土ブロックへ大さき雲母。
 6. 3.0YR 4/2 桃色シルト 粘性-微弱しまり-弱中灰白色土層細小%。



3号曲轴WE断面

- 8-6
 1. 10YR3/3 黄色シルト 粘性なし しまりなし
 2. 2.5Y3/3 黄褐色シルト 粘性・ほとんどなし しまり・弱
 3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土シルト 粘性・ほとんどなし しまり・弱 (感)



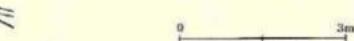
3号曲轴西侧斜面断面

- | | |
|--------------|---------------------------|
| C-4 | |
| 1. 7.5YR 4/2 | 浅褐色シルト 粘性一なし しまり一なし (表上) |
| 2. 2.5Y 2/2 | オリーブ褐色シルト 粘性一ほとんどなし しまり一弱 |
| 3. 50YR 4/3 | 暗褐色シルト 粘性一弱 しまり一弱(中) |
| 4. 30YR 4/5 | 褐色シルト 粘性一微弱 しまり一弱 |



3号曲輪東側斜面断面

- | | |
|--------------|-------------------------|
| 2-2 | |
| 1. 7.5YR 4/3 | 褐色シルト 粘性・なし しまり・なし |
| 2. 10YR 3/3 | 暗褐色シルト 粘性・なし しまり・ほとんどなし |
| 3. 10YR 4/2 | 同暗褐色泥炭シルト 粘性・なし しまり・弱 |
| 4. 2.5YR 6/4 | オーラビラ色シルト 粘性・微弱 しまり・弱 |
| 5. 2.5YR 3/2 | 暗褐色シルト 粘性・ほとんどなし しまり・弱 |



L=40

4号曲輪（第11図、写真図版10、11、12、24、27）

＜位置＞ 調査区IVD 7 a～IVD 9 c グリッド、標高39.598 m付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約7.5 m、短軸約6 m、面積約45m²で、3号曲輪の直下にあり、参道を挟んでやや東側に多く広がっている。真砂の層直下の混合土層は盛土かと思われ、尾根に沿って広がっていて幅は約5 mである。南側の平坦部は神社の参道を作る際に、地形改変を受けている可能性が高い。3号曲輪直下にあり、曲輪がほぼ連続しているような状況でもあるため、4号曲輪と合わせて1つの曲輪としてとらえることもできる。

＜埋土＞ II層の下に盛土・整地層と思われる層が見られ、尾根筋に細長く広がっている。真砂の層の直下に、黒褐色と灰白色の混合土層が薄く乗っている。

＜出土状況＞ 寛永通寶の銭（文の文字入り31、無背銭64）が出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

5号曲輪（第12図、写真図版10、11、12）

＜位置＞ 調査区IVD 10 b～VD 1 c グリッド、標高34.442 m付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約9 m、短軸約4.5 m、面積約40.5m²で、3・4号曲輪より一段低い所にあり、参道を挟み東側に多く広がっている。真砂の層は、幅約5 m、長さ5 m、先端部（南端）は、近・現代の電柱埋設により切り落され、正確な規模は分からず。また、南西側も、近世の参道によって破壊を受けていると思われる。3・4号曲輪より一段低い所に形成されている。ほぼ平坦で傾斜は殆ど無い。南側と西側が、それぞれ、電柱埋設と参道建設により地形改変を受けており、曲輪の正確な規模は、把握できなかつた。

＜埋土＞ II層の下に、真砂の基盤層が確認された。削平により平坦地を形成したものと思われる。真砂の層は、上部（1～4号曲輪）に比べて、若干黄色が濃い。

＜出土状況＞ 電柱の跡と思われる穴が2つ見られる。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

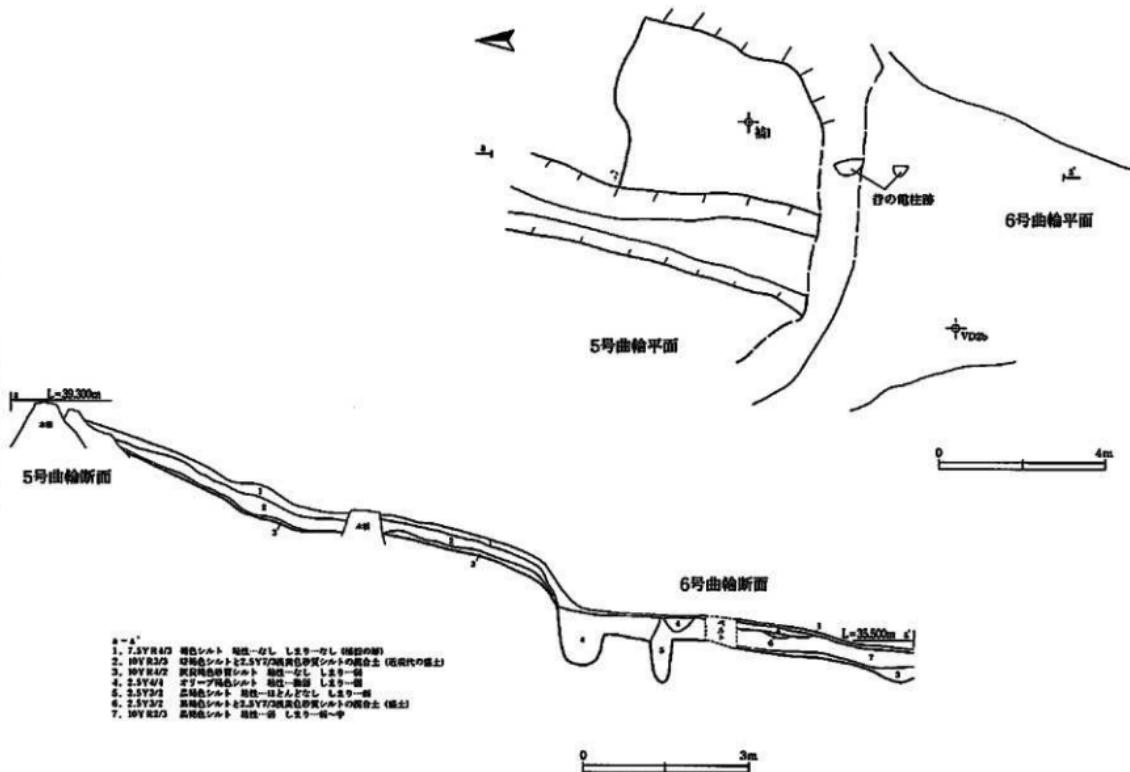
6号曲輪（第12、13図、写真版10、11、12）

＜位置＞ 調査区VID 1 a～VD 3 a グリッド、標高32.942 m付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約10.5 m、短軸約4.5 m、面積約47.25m²で、5号曲輪の直下に参道を挟み、広がっている。造構は、尾根のみならず、斜面側にまで（若干ではあるが）まわり込んでいる。削った土を南側に盛り、曲輪を形成している。参道や電柱埋設に伴い、かなりの土が動かされているため、造構の正確な規模は把握しかねるが、斜面側にも若干回り込むことが予想される。他の曲輪と同様、西側部分はこの参道により削り取られている。さらに、近現代と思われる電柱埋設痕により、曲輪自体が削平をかなり受けている。断面観察から、東側尾根筋より土を削り、西側に向かって盛土を行い整地した模様がうかがえる。東側は、やや盛り上がり、若干土壠状をなしている。もともと複雑な地形（中央付近やや凹む）を埋める形で、曲輪を營繕したものではないかと考えられる。東側を削り、西側へ土を盛ってつくっていたと思われる。

＜埋土＞ 電柱が埋設されていた面であり、搅乱層が主体となる。電柱痕に褐色系の搅乱土が埋まり、そ

第12図 5号曲輪・6号曲輪(1)



の上部灰白色の真砂の擾乱層が薄く乗っている。曲輪は、切り出し部と盛土部により構成される。基本的に、削った土を南側に盛っている。造構南端部は、近世もしくは、近・現代の盛土がされている。参道に伴うものと考えられる。

＜出土状況＞ 造構南端側からは竈柱埋設にかかるアンカーがでてきており、この部分の擾乱もあり、断面も複雑である。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

7号曲輪（第14図、写真図版13）

＜位置＞ 調査区VD 3 a～VD 5 c グリッド、標高 27.813 m付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約15m、短軸約3m、面積約45m²で、6号曲輪より約6mほど直下の部分で、東部断面は切岸状になっている。尾根南端の7号曲輪は、参道から離れている。ここからも、近・現代と思われるアンカーが出てきており擾乱をうけている。

＜埋土＞ 曲輪中央付近は盛土層で、南端側は擾乱もあり、複雑である。

＜出土状況＞ 近・現代と思われるアンカーがでてきており、擾乱をうけている。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

8号曲輪（第15図、写真図版14、22）

＜位置＞ 調査区VC 9 g～VC 1 i グリッド、標高 32.45 m付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約10.5m、短軸4.5m、面積約47.25m²で、6号曲輪の東側約15m付近で、8号曲輪の後ろは切岸になっている。切り出した土により盛土した部分を8号曲輪、切った部分は、2号切岸とした。断面図から判断して人為的痕跡が確認されることから曲輪であるが、他の曲輪との連携（犬走り、武者走り）を考えると、付近にそのような造構がみられない。「孤立した曲輪」となっている。

＜埋土＞ 斜面側を削り、その土を盛って平坦部を作り上げている。斜面部は、Ⅱ層下がそのまま基盤層となる。盛土部分は、Ⅱ層下から平坦になるところで確認され、黒色～黒褐色土で黄褐色土粒が混入する。

＜出土状況＞ 石臼（5）が検出面から出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

9号曲輪（第16図、写真図版15、27）

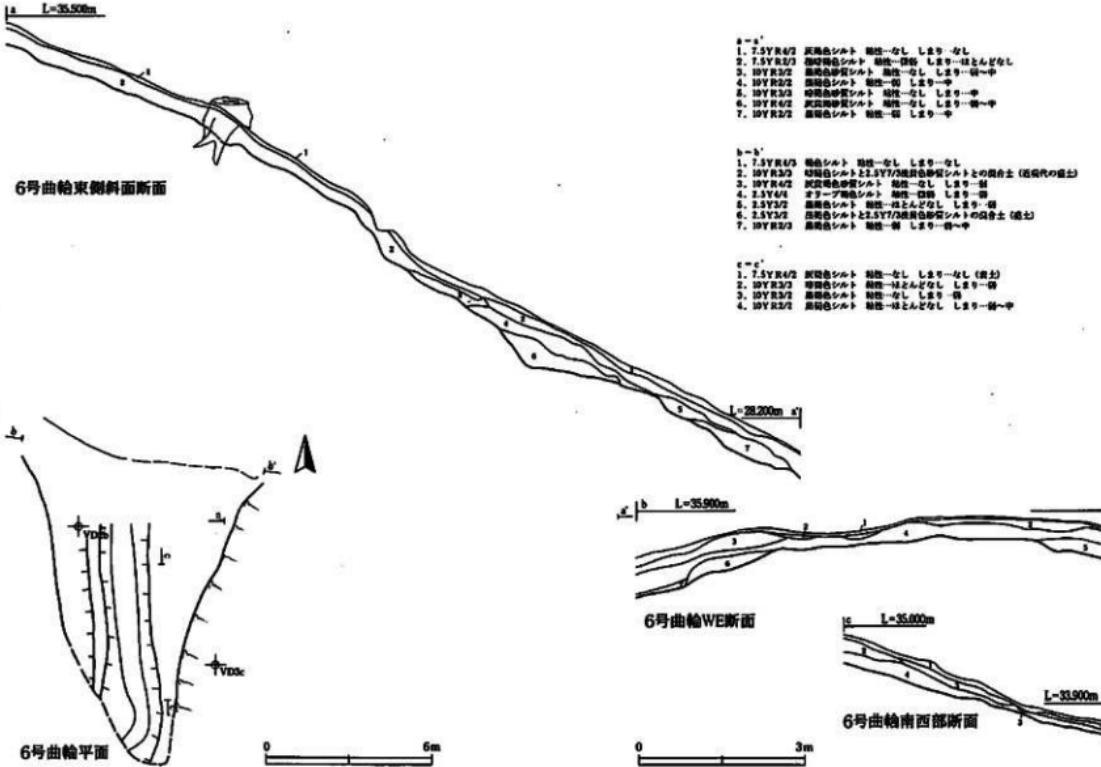
＜位置＞ 調査区VIC 5 i～VIC 7 i グリッド、標高 40.398 m付近

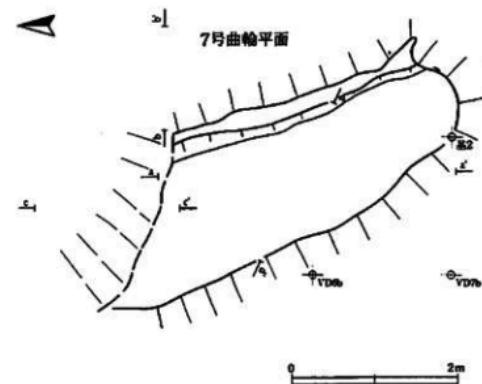
＜規模・形態＞ 規模は、長軸約7.5m、短軸約3m、面積約22.5m²で、3号曲輪すぐ東隣にある。2号、8号とはほぼ同一レベルで、帶曲輪的様相を呈している。

＜埋土＞ 暗褐色が主体である。層序に関しては他と変わりはない。

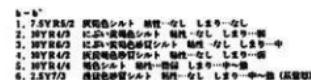
＜出土状況＞ 寛永通寶の銭（無背銭65）が出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

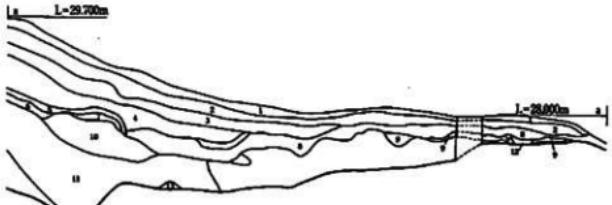
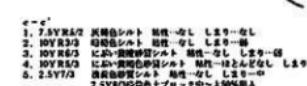




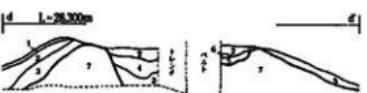
7号曲线WE断面(切岸状部分)



7号曲线NS断面(斜面上侧)



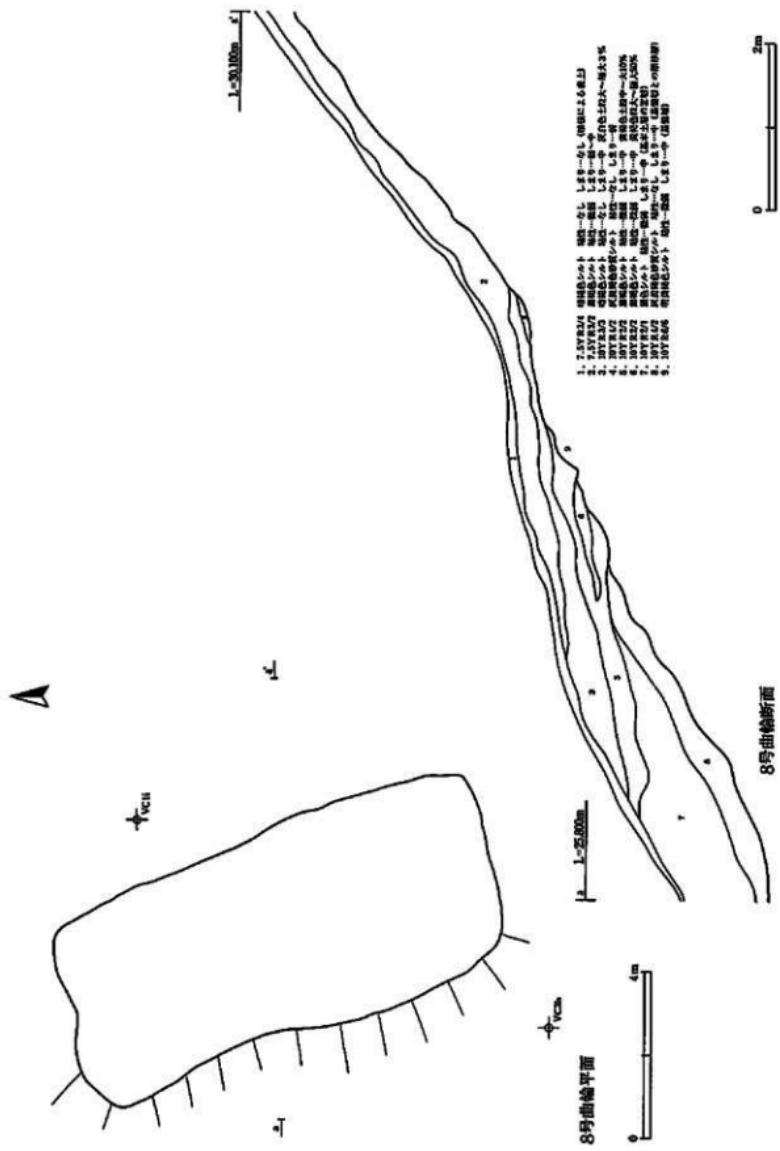
7号曲轴断面



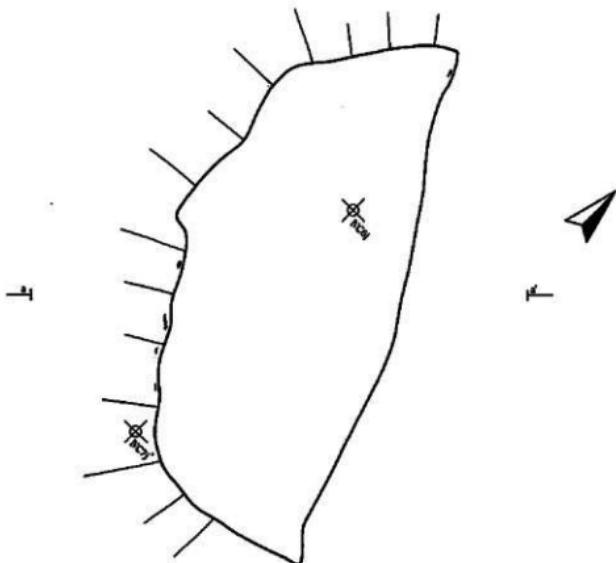
7号曲轴WE断面

- | $d = d'$ | 成形条件 | 物理的性質 | 機械的性質 |
|--------------|--------------|-------|------------|
| 1. T5Y/T4Z | 低密度シルト | 吸水性なし | しまりやなし(表土) |
| 2. T5Y/T2Z | 高密度シルト | 吸水性なし | しまりや中 |
| 3. T5Y/T2 | 高砂シルト | 吸水性なし | しまりや中 |
| 4. 2.5Y/T3/1 | オキナワリップ高砂シルト | 吸水性なし | しまりや中(底土) |
| 5. 2.5Y/T2 | 高密度高砂シルト | 吸水性なし | しまりや中(底土) |
| 6. 2.5Y/T1 | 高密度高砂シルト | 吸水性なし | しまりや中 |
| 7. 2.5Y/T3/1 | 高密度高砂シルト | 吸水性なし | しまりや中(底土) |

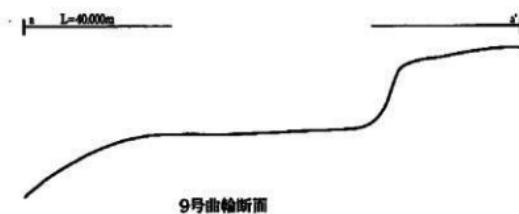




第15圖 8号曲輪



9号曲輪平面



9号曲輪断面



第18图 9号曲輪

2 土坑・土壘

1号土坑（第9図、写真図版16、24、25）

＜位置＞ IV D 3 a グリッド中央付近

＜規模・形態＞ 規模は、直径約3m、深さ2mで、1号曲輪の東端にある。断面はフラスコ状をなし、一見すると、绳文時代の土坑に見える。よく観察すると、壁の張り出しが、覆土が埋まる過程で、中央部の凹みに向かって、地すべり状に移動したものであることが判明した。覆土は褐色土主体であり、中世城館の盛土を切ってつくられていることから、少なくとも中世より新しい近世以降のものである。平面形は、ほぼ円形基調をなしている。一部やや不整な箇所があり、上端に関しては、土肩（覆土）の滑り込みによると思われている大きなプランの南西端に最も低くなる部分が見られる。覆土中～下部より寛永通寶數枚、釘と思われる鉄製品が散点出土した。覆土等の觀察状況、平面形等から考えて、具体的な用途・機能については不明であるが、松の根の鋸削跡であることがわかった。

＜埋土＞ 土坑付近は新しく2層、3層が混ざり合う部分が見られる。

＜出土状況＞ 寛永通寶の銭（元の字入り21～23、文の字入り25～26、無背銭32～34）が出土している。

＜時期＞ 近・現代と思われる。

1号土壘（第9図、写真図版17、22、24、25）

＜位置＞ IV D 1 a～IV D 3 c グリッドの南東側付近

＜規模・形態＞ 規模は、切り出しによりつくられたと考えられる区域では、表土（麻葉土）すぐ下に、地山基盤層（真砂）が確認されるのに対し、盛土による駆逐地がおこなわれたと考えられる地域では、真砂の上に来る黒褐色土層の上に中世の盛土がある。その上面の近世部分については、端部を盛り上げ、土壘状として平場の周辺に巡らされている。

＜埋土＞ 中世の盛土面よりもさらに、一段高くなっている。（真砂と黒褐色土の混合土と思われる）炭化物（小～中）が混入する。

＜出土状況＞ 盛土中から寛永通寶（文の字入り27～28、無背銭35～45）が、磁器破片（4）、釘（6、11）が出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

3 切岸

尾根頂部の1号曲輪直下と、調査区中央部付近の8号曲輪で確認されている。防御施設として人工的に作られた切岸は、山の斜面を垂直に切り取って壁を作り外敵の侵入を防ぐために作られている。南西側の急傾斜を利用して作られている。

4 大杉神社（参道跡）

参道を上がり頂上部分にかつて存在した大杉神社については、次のような資料がある。

所在地 山田町北浜町 祭神 天手力雄命 例祭 9月16日

＜由来＞ 天明年間（1781）当地に漂浪し来る一修驗者と漁民との感情の衝突があり、修驗者は撲殺され湾内の島に葬られた。そのため里人は彼を島の防と称した。そのためか不漁続きとなり、集落の住民はたたりであると考え、怨靈を弔慰するため柳沢の山頂に一祠堂を建立した。ついで、ここに漁の神網塔大杉の心靈を奉祀し大杉神社と称した。嘉永年間（1848）現在の場所に移し、祀った。柳沢山頂の祠堂に納められている棟札には次のように記され述べられている。（山田町教育委員会 1991：p 704～p 705）

天下太平國家安穏五穀成就	} 墓主頭世話人
天神万民豊楽當村産子繁昌	
奉上棟大杉大明神社再興造築成就之修	
地神棟大守公御武運長久	
海上安全大漁潤足	
神主大久保伊賀芳春	
大久保日向湯造	

このことから江戸時代後期のものであることがわかる。現在は、棟札に書かれてある字も見づらく、よくわからないが、形だけは残っている。付近には鏡も出土しており、近隣の人達は大漁を祈願してお参りをしたものと思われる。

遺構（第17図、写真図版22、27）

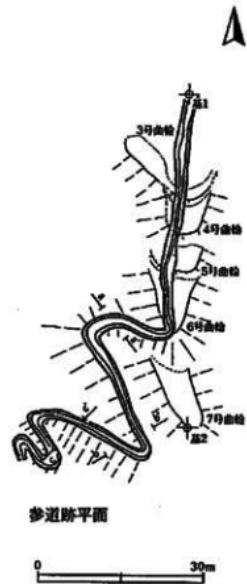
＜位置＞ VD 9 g～IVD 5 c

＜規模・形態＞ 3～6号曲輪の尾根伝いを地形改変して道を作り、6号曲輪下部からは、南西よりに左右に曲がりながら作られている。

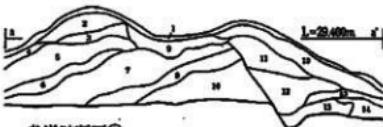
＜出土状況＞ 純文時代の深鉢の破片（1）地文（R L）が第Ⅲ層下から、皿の破片（3）が1号曲輪の直下の参道跡トレーニングのⅡ層下部から、寛永通寶の銭（無背銭66）が出土している。

＜時期＞ 江戸時代と思われるが、時期の特定はできない。

第17回 大林寺社（歩道跡）



- L=2'
1. 7.5YR 4/2 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一なし
 2. 2.5Y 7/6 黄褐色砂質シルト 軟弱一なし 硬性一なし しまり一弱 (底土)
 3. HYR 2/3 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一弱 (底土)
 4. HYR 2/3 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一弱 (底土の上部)
 5. HYR 2/1 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一弱 (底土の上部)
 6. HYR 4/6 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一なし しまり一中
 7. HYR 5/6 黄褐色シルト 硬性一弱 しまり一中
 8. 2.5Y 7/6 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一中
 9. HYR 3/4 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一中
 10. HYR 4/2 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一弱 しまり一中
 11. 2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂質シルト 硬性一なし しまり一弱 しまり一中
 12. HYR 4/2 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一弱 しまり一中
 13. HYR 4/3 黄褐色砂質シルト 硬性一なし しまり一弱 しまり一中
 14. HYR 2/6 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一弱
 15. 2.5Y 7/6 黄褐色砂質シルト 硬性一なし しまり一弱
 16. 2.5Y 7/3 黄褐色砂質シルト 硬性一なし しまり一弱 (底土)



- b—c'
1. 7.5YR 4/2 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一なし
 2. HYR 4/2 黄褐色シルト 硬性一なし しまり一弱
 3. HYR 4/3 に近い黄褐色砂質シルト 硬性一なし しまり一弱
 4. 2.5Y 4/4 黄褐色砂質シルト 硬性一なし しまり一弱
 5. 7.5YR 4/3 黄褐色砂質シルト 硬性一なし しまり一なし



5 出土遺物

(1) 出土した土器・陶器・石製品について

土器については、縄文土器の破片が2点出土した。

1点は深鉢で、参道跡トレーンチ（8号曲輪）付近の第3層下の黄褐色土より出土した。地文（RL）の紋様である。

もう1点も深鉢で、（2号曲輪）第2層より出土した。口縁部付近と思われる。

陶磁器については、破片1点が1号土壠盛土より出土した。近世の磁器の確かと思われる。

石製品については、1／4位の破片1点が8号曲輪の検出面より出土した。これらの遺物はいずれも尾根の南から東にかけての曲輪で見つかっている。

(2) 出土した貨幣について

出土した貨幣は全て寛永通寶である。寛永通寶は、江戸時代に用いられた代表的な銭貨で、江戸幕府が寛永13年（1634）に鋳造した新銭で、江戸と近江坂本で寛永通寶銅一文銭の鋳造に踏みきり、さらに翌年には水戸・仙台・吉田・松本・高田・長門・備前・豊後の8か所に鋳造所を設け、大規模な鋳造を行った。この他の鋳造地も指摘されているが、鋳造高は全体で275万貫文と推定されている。

寛永通寶は日本の年号をもつ良質の銅貨であり、中国錢やその模範銭を凌駕すべく作られたわが国独自の銭貨であった。発行と同時に私鋳が禁じられ、以後銭は幕府が許可した裁庫において鋳造するのを原則とした。

寛永通寶の鋳造は寛永17年（1640）にいったん停止され、新銭鋳造とともに下落した銭相場は正保年間を底に上昇に転じ、以後銭貨不足の状態が続いた。

これに対し明暦2年～万治2年（1656～59）に江戸で鋳錢が行われたが、特筆すべきは寛文8年～16年間（1626～1634）江戸亀戸で呉服師後藤綱助らの請負でおこなわれた寛永通寶の増鋳である。

背面に文の字が鋳込まれた文銭と通称された。鋳造高は197万貫文あるいは213万貫とも言われ、これによって古銭が排除され寛永通寶による銭貨の統一が達成されたと述べている。（兵庫埋蔵調査会 1998：p 8）

古銭家は、初鋳以来のものを古寛永、寛文の時代以降にできたものを新寛永としている。新寛永は、銭の背面内部に「文」の文字が鋳造されている。ちなみに明治4年（1871）には、旧銅貨と寛永通寶とは500枚が1円に換えられることが定められている。

本遺跡から出土した銭の中には、背面内部に「文」の文字が7つ、「元」の文字が4つ含まれている。古寛永と新寛永の区分は、書体と銭容からも分類が可能で、ポイントは「寛」と「寶」字の大きな相違である。古寛永は「寛」の字の12画と13画の頃が相接し、「寶」字の貝画末尾が「ス」（ス貝寶）である。新寛永は「寛」字の12画と13画の頃が離れ、「寶」字の貝画末尾が「ハ」（ハ貝寶）になっていることがわかつたと述べている。（兵庫埋蔵調査会 1997：p 47）

(3) 出土した金属器・鉄滓について

かつて、沢田Ⅱ遺跡からは、三陸縱貫自動車道の路線範囲だけの発掘ではあるが、縄文時代の製鉄、奈良

時代の製鉄・鍛冶工房と集落、中世城館の造成事業が明らかになった。中でも奈良時代の製鉄炉は、上村遺跡に次ぐ2例目の奈良時代の製鉄炉であることがわかったと述べている。

また、隣接する房の沢IV遺跡から、7・8世紀の古墳群が検出されるなど、鉄生産に関わる集団がこの遺跡を含め、そのころからこの地域で活躍していたことが推測されると述べている。(佐々木清文 1997: p 47)

本遺跡からは、金銅器として釘・十手・鉈・鉄貨・鉄津が出土しており、これらは、1号曲輪、1号土坑、1号土塁を中心として発掘されている。

釘については、13点が1号曲輪、1号土塁から出土しており角釘であった。中世の時代以降に板を打って家や柵などを打つために使ったものではないかと推測される。

十手については、1点が1号曲輪頂部大杉神社跡平場土塁東端部直下(表探)から出土した。この付近の捕吏が落したものかどうか、また、津波により流されたものかどうかはよくわからない。

鉈については、1点で出土地点が不明である。江戸時代に木の伐採に使用したものかどうか、近隣の遺跡でかつて使用されたものかどうか、また、津波等で流されたものかどうかはよくわからない。

鉄貨については、47点が1号、2号、3号、4号、9号曲輪、参道跡、1号土坑、1号土塁から出土した。江戸時代に鋳造されたもので、曲輪を変更して神社を作った際のお賣錢ではないかと考えられる。

鉄津については、2点出土した。鑑定を依頼していないので、構成鉱物相、成分等の詳細はわからない。いずれも、II層からIII層にかけての中世の遺構面から出土しているので、中世以前の遺物と推測される。

<参考文献>

山田町史編纂委員会(1991):『山田町史 中巻』山田町教育委員会

山田町津波誌編纂委員会(1982):『山田町津波誌』山田町教育委員会

斎藤 忠(1998):『日本考古学用語辞典』学生社

永井久美男(1996):『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会

永井久美男(1997):『近世の出土銭!』一論孝編ー兵庫埋蔵銭調査会

永井久美男(1998):『近世の出土銭 II』一分類図版編ー兵庫埋蔵銭調査会

佐々木清文(1997):岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第268集(沢田II遺跡)

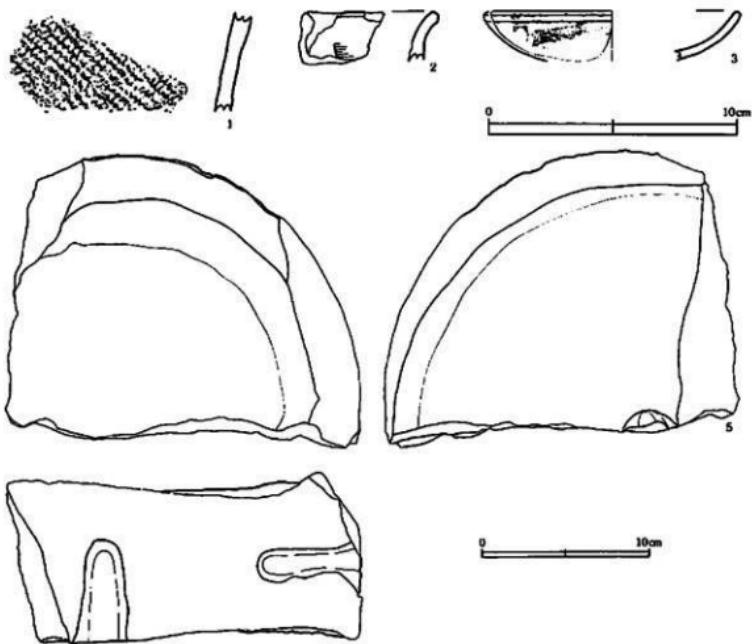
大庭薫史・佐藤良和・星雅之・佐々木清文

(1998):岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第287集(房の沢IV遺跡)

星 雅之(1997):現地説明会資料(房の沢IV遺跡)

渡辺洋一・酒井宗孝・鶴垣雅弘

(1995):岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第218集(大畑I、II遺跡)



第2表 土器観察表

遺物No	出土地点			器種	備考
	グリッド	出土遺構名	層位		
1	V C 3 h	参道跡トレンチ	第3層下	深鉢	地文 (R.L.)
2	IV C 2 j	2号曲輪付近	第2層	深鉢	II級部

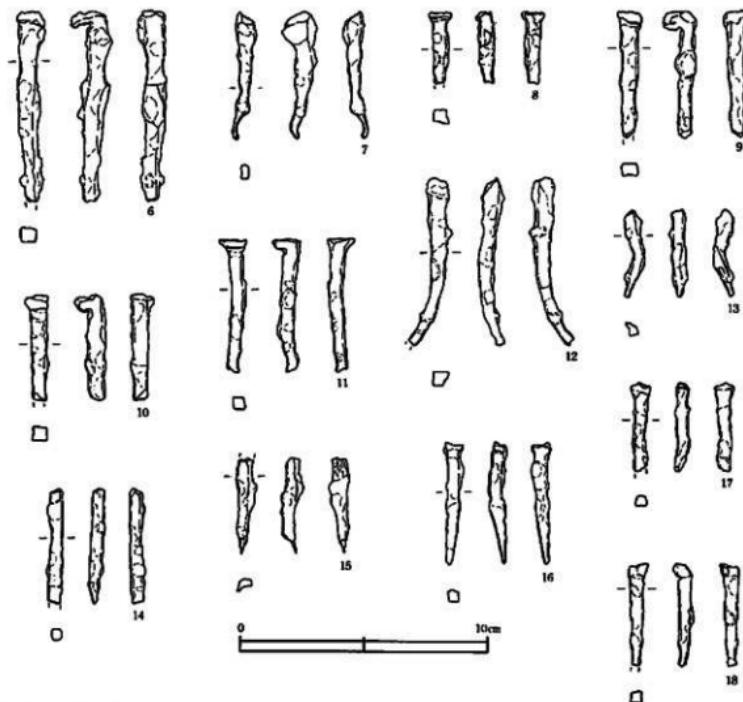
第3表 陶器観察表

遺物No	器種	出土地点		出土層位	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	備考
		グリッド	遺構名					
3	皿	IV D 5 c	参道	第2層下部	2.0	10.4		I号曲輪下の参道跡

第4表 石製品観察表

遺物No	種類	出土地点		出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
		グリッド	遺構名						
5	石臼	V C 2 h	8号曲輪	検出面	17.7	21.25	10.0	3840	砂岩、北上山地

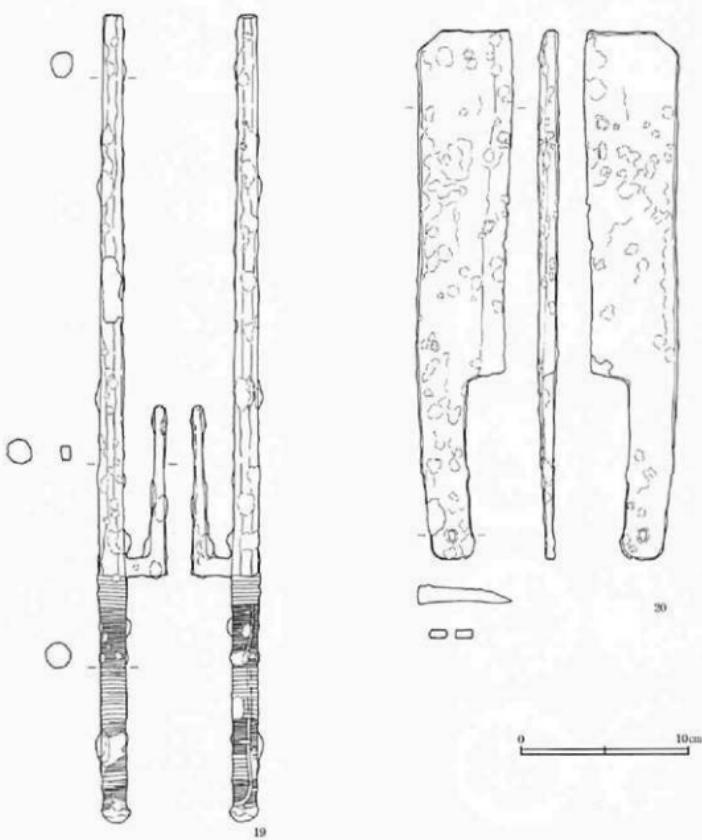
第18図 出土遺物 1 (土器・陶器・石臼)



第5表 金属器観察表(1)

遺物No.	器種	出土地点		出土層位	部 位	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	材 質	備 考
		グリッド	遺構名							
6	釘	IVD 3 d	1号土塼	盛土		7.70	1.15	11.98	鉄	
7	釘	IVD 4 a	1号曲輪	検出面	完形	5.15	1.00	3.51	鉄	
8	釘	IVD 4 a	1号曲輪	検出面	半形	2.90	0.90	1.75	鉄	
9	釘	IVD 4 a	1号曲輪	検出面		5.10	1.00	6.02	鉄	
10	釘	IVD 4 a	1号曲輪	検出面		4.30	1.00	4.52	鉄	
11	釘	IVD 4 a	1号土塼	検出面		5.35	1.10	5.53	鉄	1号曲輪土塼との複合
12	釘	IVD 4 a~4b	1号曲輪			6.75	1.70	5.58	鉄	複合
13	釘	IVD 4 b	1号曲輪		完形	3.45	0.80	1.73	鉄	複合
14	釘	IVD 4 b	1号曲輪			4.65	0.70	3.32	鉄	複合
15	釘	IVD 4 b	1号曲輪		完形	3.85	0.85	2.92	鉄	複合
16	釘	IVD 4 b	1号曲輪		完形	4.90	0.80	2.19	鉄	複合
17	釘	IVD 4 b	1号曲輪			3.55	0.80	2.19	鉄	複合
18	釘	IVD 4 b	1号曲輪			4.10	0.80	2.69	鉄	複合

第19図 出土遺物2(鉄製品1)



第5表 金属器観察表(2)

遺物No.	器種	出土地点 グリッド	遺構名	出土層位	部 位	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	材 質	備 考
19	十手	IVD 4 d	1号曲輪	表採	完形	31.7	5.80	647	鉄	頂部大形神社跡平塗朱色直下
20	鉈	不明	不明	不明	完形	48.0	4.35	499	鉄	

第20図 出土遺物3(鉄製品2)



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31

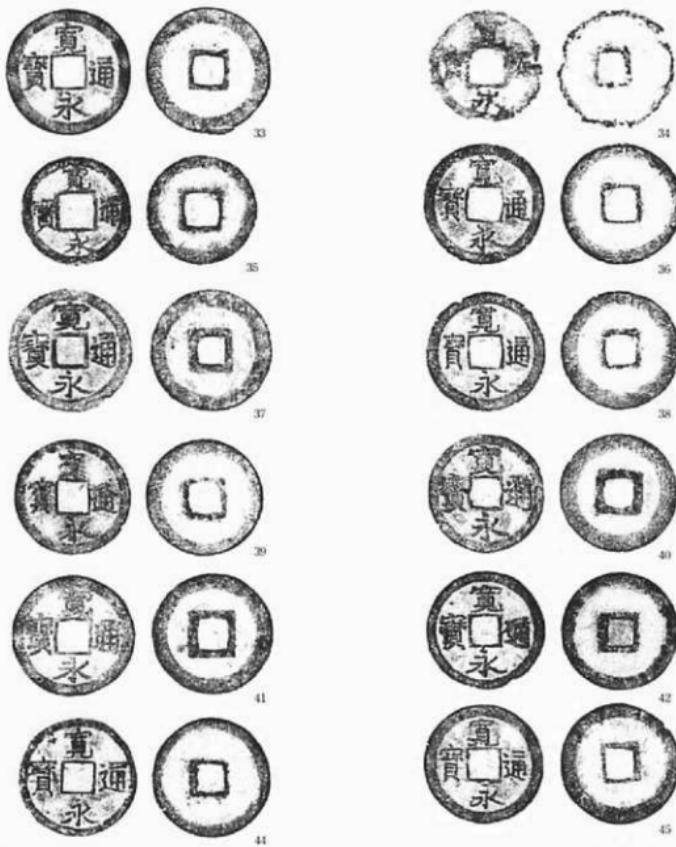


32

第6表 銭貨観察表(1)

No.	種類	グリッド	検出遺構	法量				備考
				直径(cm)	穿径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
21	寛永通寶	IVD 4 b	1号土坑	2.20	0.60	0.10	2.37	擾乱
22	寛永通寶	IVD 4 b	1号土坑	2.20	0.60	0.10	2.67	擾乱
23	寛永通寶	IVD 4 b	1号土坑	2.20	0.60	0.10	1.26	擾乱。1/4欠損
24	寛永通寶	IVD 6 d	2号曲輪	2.20	0.60	0.10	1.99	
25	寛永通寶	IVD 4 b	1号土坑	2.50	0.60	0.10	3.01	擾乱
26	寛永通寶	IVD 4 b	1号土坑	2.45	0.60	0.10	3.35	擾乱
27	寛永通寶	IVD 4 b	1号土壙	2.50	0.55	0.10	3.46	
28	寛永通寶	IVD 4 d	1号土壙	2.50	0.60	0.10	3.63	試掘トレンチ
29	寛永通寶	IVD 6 c	2号曲輪	2.50	0.60	0.10	3.32	
30	寛永通寶	VD 4 c	2号曲輪	2.50	0.60	0.10	2.94	
31	寛永通寶	不明	4号曲輪	2.50	0.60	0.10	3.13	木根付着
32	寛永通寶	IVD 4 b	1号土坑	2.30	0.60	0.10	2.60	擾乱

第21図 出土遺物4(銭貨1)



第6表 銭貨観察表(2)

No.	種類	グリッド	検出構構	法 量				備考
				直径(cm)	穿孔(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
33	寛永通寶	IVD 4 b	1号土坑	2.50	0.65	0.10	3.05	埋乱
34	寛永通寶	IVD 4 b	1号土坑	2.30	0.60	0.10	2.48	埋乱
35	寛永通寶	IVD 3 a	1号土坑	2.20	0.70	0.10	1.55	
36	寛永通寶	IVD 4 b	1号土壠	2.40	0.60	0.10	3.65	
37	寛永通寶	IVD 4 b	1号土壠	2.50	0.55	0.10	3.22	
38	寛永通寶	IVD 4 b	1号土壠	2.40	0.60	0.10	2.66	
39	寛永通寶	IVD 5 c	1号土壠	2.35	0.60	0.10	3.02	
40	寛永通寶	IVD 5 c	1号土壠	2.40	0.60	0.10	2.75	
41	寛永通寶	IVD 5 c	1号土壠	2.45	0.60	0.10	2.78	
42	寛永通寶	VD 4 d	1号土壠	2.40	0.50	0.10	3.00	
44	寛永通寶	IVD 5 d	1号土壠	2.40	0.60	0.10	2.43	
45	寛永通寶	不明	1号土壠	2.40	0.60	0.10	2.48	鉢土

第22図 出土遺物5(銭貨2)



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57

第6表 錢貨観察表(3)

No.	種類	グリッド	接出構造	直徑(cm)	法厚(cm)	裏厚(cm)	重さ(g)	備考
46	寛永通寶	IVC 4 b	1号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.88	
47	寛永通寶	IVD 2 a	2号曲輪	2.30	0.65	0.10	2.12	
48	寛永通寶	IVD 6 a	2号曲輪	2.45	0.60	0.15	3.10	
49	寛永通寶	IVD 6 b	2号曲輪	2.30	0.60	0.10	2.69	
50	寛永通寶	IVD 6 b	2号曲輪	2.50	0.60	0.10	3.33	
51	寛永通寶	IVD 6 c	2号曲輪	2.30	0.60	0.10	3.34	
52	寛永通寶	IVD 6 c	2号曲輪	2.45	0.55	0.10	3.23	
53	寛永通寶	IVD 6 c	2号曲輪	2.45	0.55	0.10	3.61	
54	寛永通寶	IVD 8 c	2号曲輪	2.40	0.55	0.10	3.61	
55	寛永通寶	IVD 6 d	2号曲輪	2.30	0.60	0.10	2.05	
56	寛永通寶	IVD 6 d	2号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.35	
57	寛永通寶	IVD 6 d	2号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.66	

第23回 出土遺物6(錢貨3)



0 5cm

第6表 錢貨観察表(4)

No.	種類	グリッド	検出造構	法 量				備考
				直径(cm)	穿径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
58	寛永通寶	VD 2 a	2号曲輪	2.35	0.60	0.10	2.17	
59	寛永通寶	VD 5 c	2号曲輪	2.40		0.10	1.99	半片
60	寛永通寶	IVD 7 b	3号曲輪	2.40	0.55	0.10	2.95	
61	寛永通寶	IVD 9 b	3号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.83	
62	寛永通寶	IVD 7 c	3号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.83	
63	寛永通寶	不明	3号曲輪	2.30	0.60	0.10	2.37	西側トレンチ
64	寛永通寶	不明	4号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.89	
65	寛永通寶	IVD 7 i	9号曲輪	2.40	0.60	0.10	3.29	
66	寛永通寶	IVD 10 b	参道	2.40	0.65	0.10	2.64	

第24図 出土遺物7(銭貨4)

V まとめ

柳沢Ⅱ遺跡に居城していた人物を探るにあたり、次の文献等を参考にしてみた。

延喜元年（1334）2月頃大沢氏の管理していた大沢の牧馬に突然山田六郎なるものが侵入し牧馬を殺害すると言う事件がおこった。犯人は捕まり、追放された。山田六郎の所領のうち飯岡村は、南部又次郎が管理に当たり、関口川の流域の山田村は、だれに管理させたのかは、『大久保告書翰』によると北畠一族、俊輔御所の被管と称した白根氏が松山、長沢のほかに関口川上流の閑を所領に授かり、二男次郎忠清に分譲したとある。また、関口川下流に山田屋丸なる者がいて、たぶん竹の御所といわれる三男を養子にやったりして、白根氏とは非常に親密な間柄であったことから、この者が南朝ゆかりの人物であったことは確かである。すると、関口川流域、山田村が北畠頼家の直轄地あるいは「東奥古伝にいう藤原朝臣某の所領と見えるに充分である。」と述べている。（下総伊都誌）（宮古地方の中世史古城物語）（山田町教育委員会 a 1991：p 237～p 238）

船越御土史には、北畠頼家は、「多賀国府、塩山城、宇都堺城、陥りて後正平2年（1347）、頼家の子頼成を船越館に奉じて船越御所と称し、これより三代六十余年間宮方の恢復を図ったが、中央に大兵を進めるに至らず、焦々の間に過ぎた。」とある。これは、南北合一までの正平24年（1369）より元中9年（1393）の24年間のことである。正平2年（1347）には頼成は、10歳か15歳ごろである。これは、頼成70歳死去説と、60歳死去説からでた発想であるが、ここでは70歳死去説が有力となっている。理由は、頼家の正室は、中納言日野資朝の女日野姫であるが子はない。『関城録史』の中に「頼家從一位右大臣を追贈さる。又男女子有り、男は頼成という。母は、花山院大納言師貞の女」とある。『西園寺秘本』別説、浪岡右兵衛大夫秀種の女房の局頭成を産むというものあるが津軽の史家は地方説としてとらない。一説のみで他の立証となるべき文献がないと述べている。（山田町教育委員会 b 1991：p 250、p 252）

頼成は70歳生存とすれば元弘2年（1332）生まれで、父頼家の在京中である。母は花山院師貞の女で、頼成は京師で生まれ、京師で育ち公卿の薦育と武士の武道を学んだのではないかとある。文明年間に出版された『大平記理尽抄』によれば正平年中、大和の多武峯で經圓義御（児島高徳）玄忠等5人とと共に太平記二巻編纂に従ったとある。また、後村上天皇の側近として奉仕し、天皇は正平23年（1368）攝津の住吉行宮では失くなり、長慶天皇が御位につく。弘和3年（1383）長慶天皇は皇位を御弟御山天皇に譲り、頼成は北畠家代々の伝統により剃髪したとある。したがって正平年中船越に下向する機会がないことになる。（西園寺秘本）

こうして日増に武家の勢力は強くなり、天皇親政の目あては遠くなり、頼成は、文中2年（1373）暫く離を避け、時の来るのを待った。賀王丸後頼大は元服前である。10歳から15歳の少年であったと思われ、いることこそ39年、焦々の中に南朝の恢復を謀ったが中央に兵を進めることができず男頼元は病弱にして応永2年（1395）8月10日に亡くなり、父頼成は応永9年（1402）8月7日歸古稀にならうとする年に亡くなった。津軽の歴史家は森林助を始め、頼成、頼元御両人は船越の地において亡くなつたと思うと、言っている。こうして応永18年（1411）船越御所3代目頼邦の時、藤崎城主安東太郎の招請により、浪岡に移住したとされていることがわかったと述べている。（山田町教育委員会 c 1991：p 262～p 263）

以上のことから、北畠一族が東北に進出し、この山田町にもかつては居城していたということは明らかである。山田町内の遺跡は、岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧（岩手県教育委員会）によると平成9年4月現在で165箇所登録されている。昭和59年に確認した城館跡の遺跡では、登間根家任、佐藤義忠、北畠頼成、大沢氏、飯岡氏、船越氏、山田閑屋丸（東夷古伝）、安倍宣任、安倍隆任、福士床次郎定保、山田六郎、田村氏、内藤氏、佐々木（荒川）氏、船越氏、安倍七郎孝任、安倍邑任等が文献などでわかっている。上記人物が柳沢Ⅱ遺跡と関わりがあると考えられるが、はっきりした証拠がなく、本遺跡の館主をはっきりと言及するには至らなかった。

当埋蔵文化財センターでは、平成2年以来国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査に伴う遺跡発掘を行ってきている。そして、そのほとんどは绳文時代の遺跡が多く、中世の発掘は少ない。

1 柳沢Ⅱ遺跡の年代観と性格

今回の発掘調査を行った結果、尾根全体の約3分の1ほどの調査であったが、山頂と尾根の地形改変が行われた曲輪、切岸、土堤などの中世城館に伴う遺構が確認された。関連する時期の出土遺物がほとんどなく、文献等も乏しく、館主は確定できなかった。江戸時代に曲輪を改変しながら参道を作り、大杉神社が作られた。頂上部から参道跡にかけては銭が見つかっている。寛永通寶2期～3期にかけての銅銭であり、17世紀後半から18世紀後半にかけてのものであることがわかった。当城館跡のように、城主名を伝承しない小集落に伴う小規模な城館跡は、そこに居住する集落民が非常時に使用する逃げ城的な要塞としての側面も見えてくる。また、太平洋の海岸線に面していることから、潮の干満や津波による潮位の変化、季節の天気状況にも左右される面が大きかったことも考えられる。今後、このような小規模な中世城館跡の歴史的な背景や意義を踏まえ、地域においてどのような役割を果たしてきたかを考えるために、近隣の新たな遺跡発掘調査が行われることで、本遺跡と関わることが明らかになってくると思われる。

＜参考文献＞

山田町史編纂委員会（1991）：『山田町史 中巻』山田町教育委員会

VI 分析・鑑定

1 柳沢Ⅱ遺跡出土炭化材樹種

早坂松次郎 「木炭協会」

資料は、1点である。炭化材は、1号曲輪埋土盛土下部、グリッド名は、IVD 5 d の地点から出土された用途不明の炭化材である。遺跡は、14世紀から15世紀後半を中心とした時代の館跡（山城）とされ、太平洋岸に張り出した尾根上（標高約52m）に立地している。鑑定の結果、マツと同定された。

写真図版



写真図版 1 遺跡遠景



完掘（西から）



完掘（南西から）

写真図版2 空中写真（1）



完損（東から）



完損（南東から）

写真図版3 空中写真（2）



調査前風景現況（南から）



調査前風景現況（北東から）

写真図版4 調査前風景



東側斜面作業風景雑物撤去（東から）

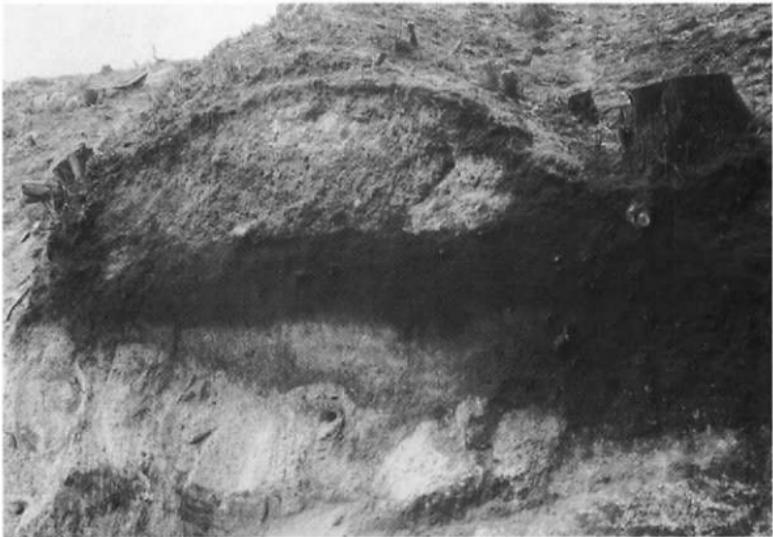


作業風景雑物撤去（南西から）



2号切岸断面（南から）

写真図版5 作業風景・2号切岸



東側斜面土壌断面（東から）



東側斜面土壌断面（東から）

写真図版6 東側斜面土壌



1号曲輪現況（東から）



1号曲輪完図（東から）

写真図版 7 1号曲輪



2号曲輪現況（東から）



2号曲輪完掘（東から）



2号曲輪断面（南から）

写真図版 8 2号曲輪



3号曲輪現況（南東から）



3号曲輪完掘（東から）



3号曲輪尾根部断面（南から）



3号曲輪断面（西から）



3号曲輪東斜面断面（南から）

写真図版 9 3号曲輪



4・5・6号曲輪現況（北西から）



4号曲輪断面（西から）



4号曲輪完掘（北から）

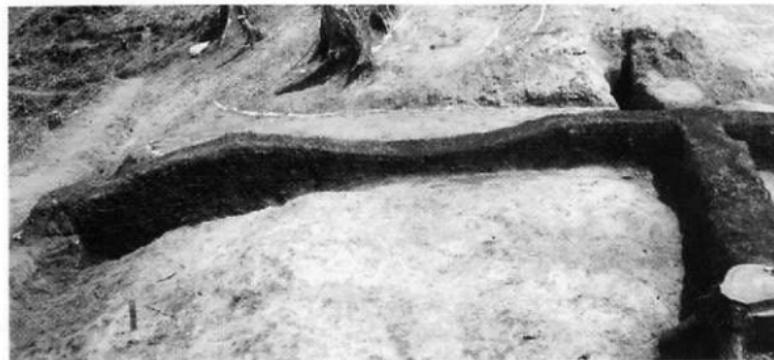
写真図版10 4・5・6号曲輪（1）



5号曲輪断面（西から）



5号曲輪完掘（西から）



6号曲輪断面（南から）



6号曲輪断面（西から）



6号曲輪完掘（西から）

写真図版11 4・5・6号曲輪（2）



6号曲輪東側斜面断面（南から）



6号曲輪東側斜面断面（南から）



6号曲輪東側斜面断面（南から）



6号曲輪東側斜面断面（南から）



6号曲輪完掘（北から）

写真図版12 4・5・6号曲輪（3）



7号曲輪現況（北から）



7号曲輪断面（西から）



7号曲輪断面（西から）



7号曲輪断面（西から）



7号曲輪断面（西から）



7号曲輪東部断面（南から）



7号曲輪完掘（北から）

写真図版13 7号曲輪



8号曲輪現況（南から）



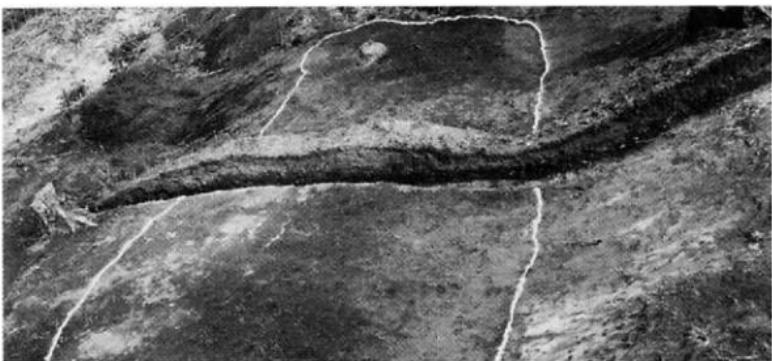
8号曲輪断面（南から）



8号曲輪断面（南から）



8号曲輪完掘（南から）



8号曲輪完掘（南から）

写真図版14 8号曲輪



9号曲輪（3号曲輪西侧）完掘（東から）



作業風景



作業風景

写真図版15 9号曲輪・作業風景



1号土坑断面（南西から）

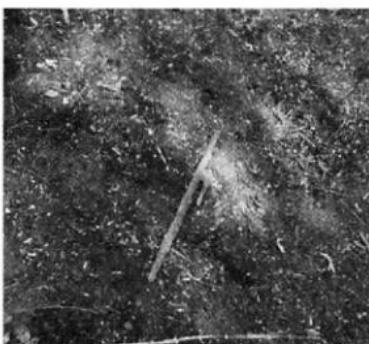


1号土坑完掘（北東から）

写真図版16 1号土坑



鉄出土状況（南東から）



鉄製品出土状況



1号土壘断面（1号曲輪含）（西から）



1号土壘・1号曲輪断面（北東から）



1号土壘・1号曲輪断面（東から）



2号土壘断面（斜面中腹）

写真図版17 遺物出土状況・1号土壘・2号土壘



大杉神社参道跡現況（南から）



大杉神社参道跡現況（南から）



大杉神社参道跡現況（南から）



参道跡断面①（西から）



参道跡断面①（西から）



参道跡断面①（西から）

写真図版18 大杉神社参道跡（1）



参道跡断面②（南から）



参道跡断面③（南から）



参道跡断面④（南から）



参道跡断面⑤（南から）



頂部全景完掘（南から）



頂部全景完掘（南から）

写真図版19 大杉神社参道（2）



北端部堀切（北側）現況（東から）



北端部堀切（北側）現況（東から）



主郭北側現況（西から）



主郭部分現況（東から）



主郭西侧曲輪（主郭直下）現況（北東から）

写真図版20 調査区外曲輪群（1）



西侧尾根曲輪現況（東から）



西侧尾根曲輪現況（東から）



西侧尾根西端曲輪現況（南東から）



西侧尾根南西端曲輪現況（西から）

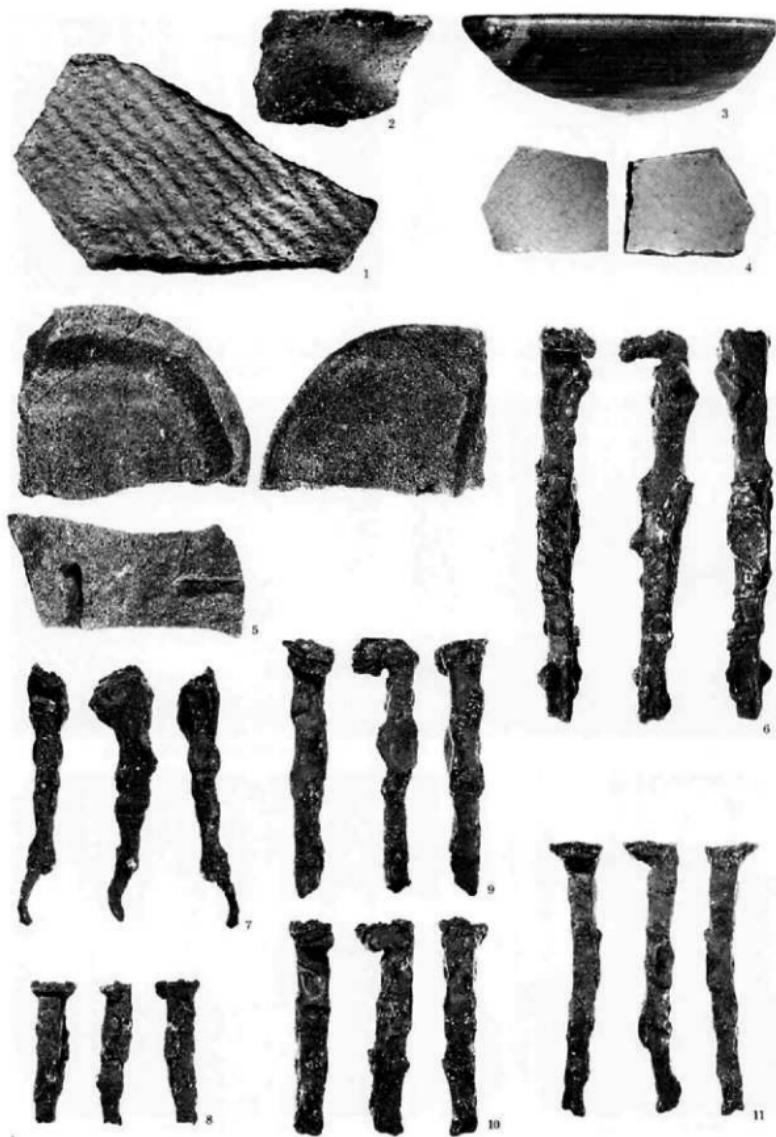


東側斜面奥蔵曲輪群現況（南西から）

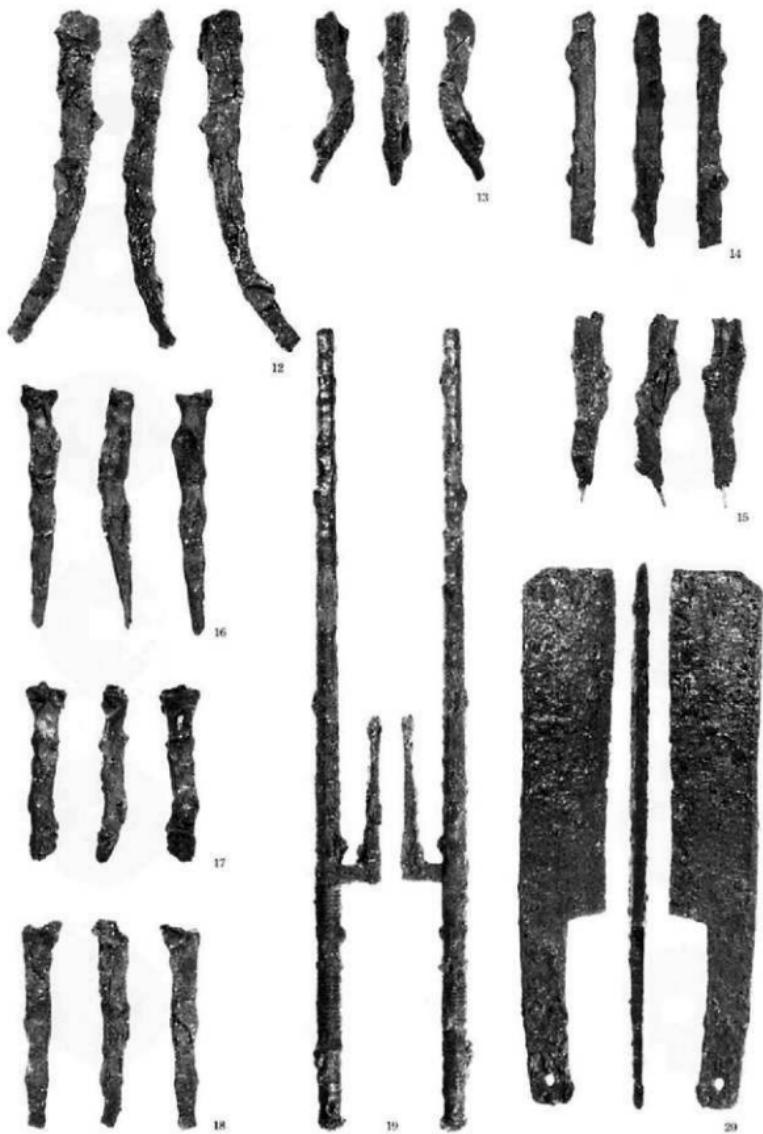


頂部直下（東側）南端現況（西から）

写真図版21 調査区外曲輪群（2）



写真図版22 出土遺物1（縄文土器・陶器・石臼・鉄製品1）



写真図版23 出土遺物2（鉄製品2）



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32

写真図版24 出土遺物3（銭貨1）



33

34



35

36



37

38



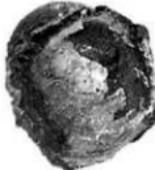
39

40



41

42



43

写真図版25 出土遺物4（鉄貨2）



44

45



46

47



48

49



50

51



52

53



54

55

写真図版26 出土遺物5（銭貨3）



57



59

58

60

61



62

63



64

65



66

写真図版27 出土遺物6（錢貨4）



写真図版28 出土遺物7（鉄滓、骨）

報告書抄録

ふりがな	やなぎさわにいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	柳沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
事業名	国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	第401集							
編著者名	阿部 敏							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦 2002年12月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やなぎさわいせき 柳沢Ⅱ遺跡	いわてけんしもへいくん 岩手県下閉伊郡 やまだちょうやまだ 山田町山田 だい1ちわり11ばん 第1地割11番 15ほか 15他	03482	0079	39度 28分 26秒	141度 57分 37秒	2001.04.17 ~ 2001.07.31	8,400m ²	国道45号 山田道路 建設工事 に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
柳沢Ⅱ遺跡	城館跡	中世	曲輪 9箇所 切岸 2箇所 土坑 1基 土塁 1基	縄文土器、陶器、石臼、骨、 十手、鉗、釘、古鏡		縄文土器・石器が 出土した遺物包含層 中世の曲輪・切岸 江戸時代後期の参道		

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長	木村昇	副所長	高橋正儀
管理課】			
課長補佐	香光美一	嘱託	桂子代子
課長補佐	正善直賀	照美邦滋	橋藤澤藤
主査	喜山山中	高加湯伊	高加湯伊
【調査第一課】		【調査第二課】	
課長補佐	勝文介透充郎	課長補佐	高橋重門
文化財専門員	大淳也進盛彦明則人晃稔文郎拓郎和晴敬和昭枝寛治兼征英造剛一美卓り輔晋彦敦志清義	文化財専門員	佐知子登澄重明彦宏夫之一彦香郎
	佐々木橋内田	文化財調査員	寅一裕泰由紀由雅淳武英治直
	木坂松野中子部部柴木村		子石部坂木慈田藤
	沢上多山澤木島村木田山田原村部地山田林村原又代藤花		藤澤川山
	佐早小金野金阿阿羽高長星杉村本青西村福北八米丸北島中坂義玉吉小木藤川太江立		金赤阿飯鈴久濱安星佐半皆潤丸
期限付調査員			
			麻里智高
			和賀裕寬子
			齋吉菊立
			藤田池花野
			木崎

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第401集

柳沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成14年12月13日

発行 平成14年12月26日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒029-0633 岩手県盛岡市下郷町11-185

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 有限会社 内海印刷

盛岡営業所 〒029-0635 岩手県盛岡市清水町8-8-108

TEL (019) 622-0288

本社 〒025-0941 岩手県釜石市上中島町4-2-4

TEL (0193) 23-5511



